令和2年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

市民の参加と協働を進める多様なコーディネーション実践研究集会2021

報告書

2021年2月23日tue. - 2月28日sun.

※Onlineによる開催

主催 認定特定非営利活動法人 日本ボランティアコーディネーター協会
市民の参加と協働を進めるコーディネーション実践研究集会企画委員会

協力 公益社団法人日本社会福祉士会
日本生活協同組合連合会
特定非営利活動法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)
特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会
一般社団法人多文化社会専門職機構
社会福祉法人大阪ボランティア協会
特定非営利活動法人ハンズオン！埼玉
東京ボランティア・市民活動センター

後援 社会福祉法人全国社会福祉協議会 社会福祉法人中央共同募金会 認定特定非営利活動法人日本NPOセンター
認定特定非営利活動法人国際協力NGOセンター 公益財団法人日本YMCA同盟 一般財団法人自治体国際化協会
一般財団法人児童健全育成推進財団 一般社団法人環境パートナーシップ会議 ESD活動支援センター
認定特定非営利活動法人日本ファンドレイジング協会 特定非営利活動法人日本病院ボランティア協会

市民の参加と協働を進める多様なコーディネーション実践研究集会は＜日本ボランティアコーディネーター協会＞が主催しています

認定特定非営利活動法人

日本ボランティアコーディネーター協会は

市民が主役の豊かで創造的な社会をつくる。

ーそれを実現するために活動しています

“ボランティアコーディネーション力”は 地域や組織活動のあらゆる場面で活かせるチカラです

私たちの暮らしや仕事にとって、“コーディネーション”の機能が不可欠になっています。市民の自発的な社会参加と継続的な活動を支える“ボランティアコーディネーション”もそのひとつ。日本ボランティアコーディネーター協会では［ボランティアコーディネーション力］を高めるための事業・活動を展開しています。

あなたも仲間になりませんか？　さまざまな学びの機会を得るとともに、全国の仲間との情報交換や交流もきっと役に立つはずです。

事業・活動の５つの柱

① ボランティアの魅力と可能性を伝える
② ボランティアコーディネーションの機能を普及させる
③ ボランティアコーディネーターのネットワークの確立
④ ボランティアコーディネーターの専門性の向上
⑤ ボランティアコーディネーターの社会的認知の促進

Japan Volunteer COORDINATORS Association

認定特定非営利活動法人
日本ボランティアコーディネーター協会（JVCA）
〒162-0825
東京都新宿区神楽坂二丁目１３番地　末よしビル別館３０Ｄ
電話 03-5225-1545　FAX03-5225-1563
https://www.jvca2001.org/　Ｅメール：jvca@jvca2001.org

は じ め に

日本ボランティアコーディネーター協会は、その前身組織での主催も含めると、1994 年度以降、毎年度、「全国ボランティアコーディネーター研究集会」を開催してきました。しかし、市民の「参加の力」で社会課題の解決を図る取り組みは幅広い市民・住民を対象に進められ、「ボランティア」というキーワードを超える形で広がってきました。そこで、これらの実践交流と協働の進化を進めるため、多方面の関係者で企画委員会を結成し、「市民の参加と協働を進める多様なコーディネーション実践研究集会」を開催することとなりました。

多様な現場で活動される方々で企画委員会を組織することができ、コロナ禍のなか、オンラインでの委員会を精力的に開催。試行錯誤を重ねつつ準備を進めました。

その結果、集会当日は、福祉、医療、保健、多文化共生、環境、教育、災害…など実に多様な場面で市民の参加を進める人々が集い、それぞれの領域を超えて出会い【越境】、話し合い【対話】、協働して新たな課題解決にむけた方策づくり【共創】を進める“学びのプラットフォーム”を提供することができました。

オンラインでの開催のため、交流面での制約はありましたが、旅費不要となったこともあって新たな参加者も多く、高い評価を得る集会となりました。ここに、その報告書をお届けします。

新たな気づきと出会いがあふれた集会の熱気が伝われば幸いです。

2021年 3 月

市民の参加と協働を進める多様なコーディネーション実践研究集会

企画委員会委員長　早瀬　昇

委員一同

市民の参加と協働を進める多様なコーディネーション実践研究集会 2021

越境×対話×共創

目　次

はじめに ---------- 1
開催概要 ---------- 3
オープニングセッション ---------- 4
分科会
A−1　多文化共生（国際交流協会）× 地域福祉（社協） ---------- 12
A−2　福祉 × 環境 ---------- 14
A−3　地縁組織 × 災害救援 NPO ---------- 16
A−4 「地域社会」×「若者」＝「明るい未来」は思考停止？ ---------- 18
A−5　生協 × 社協 ＝ 競争？共創？ ---------- 20
B−1 「ない」から「創った」地域の居場所 ---------- 22
B−2　外国人住民と地域防災 ---------- 24
B−3　子どもと地域の育ちを支えるコーディネーションを探る ---------- 26
B−4　ボランティア活動を止めるな！！ ---------- 28
B−5　孤立や孤独に寄り添うコーディネーションとは？ ---------- 30
C−1 ［さそう］リクルート大作戦 ---------- 32
C−2 ［まぜる］「たまたま」を創り出すおもしろさ ---------- 34
C−3 ［ひきだす］縁（エン）パワメント ---------- 36
C−4 ［つくる］プログラム開発力の向上 ---------- 38
C−5 ［きめる］決める？決めない？ みんなで考える「合意形成」 ---------- 40
クロージングセッション ---------- 42
オプション企画　前夜交流会 × 放課後おとな教室 ---------- 46
参加者属性・アンケート結果 ---------- 48
企画委員名簿・委員会開催状況 ---------- 52

■開催概要■

- 日　時 2021 年 2 月 23 日(火・祝) 14:00～16:00 オープニングセッション
  ※～27 日(土) 12:00 までオンデマンド配信
  2 月 27 日(土) 13:00～17:10　A 分科会・B 分科会
  2 月 28 日(日) 10:00～14:30　C 分科会・クロージングセッション
- 参加費 一般 6,000 円、2 人目割引 *5,500 円、JVCA 正会員・準会員 5,000 円
  *同組織の 2 人目以降の方が対象になります
- 方　法 オンライン
- 対　象 ・地域や組織で人や団体のコーディネーションに携わる方
  ・市民の参加と協働の場をつくるコーディネーション実践に関わる方
  ・異なる分野とつながり、社会課題の解決を目指したい方
- 参加者 200 人 ※申込者数
- 主　催 認定特定非営利活動法人日本ボランティアコーディネーター協会
  市民の参加と協働を進めるコーディネーション実践研究集会企画委員会
- 協　力
  日本生活協同組合連合会／特定非営利活動法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)／特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会／公益社団法人日本社会福祉士会／一般社団法人多文化社会専門職機構／社会福祉法人大阪ボランティア協会／特定非営利活動法人ハンズオン！埼玉／東京ボランティア・市民活動センター
- 後　援
  社会福祉法人全国社会福祉協議会／社会福祉法人中央共同募金会／認定特定非営利活動法人日本 NPO センター／認定特定非営利活動法人国際協力 NGO センター／公益財団法人日本 YMCA 同盟／一般財団法人自治体国際化協会／一般財団法人児童健全育成推進財団／一般社団法人環境パートナーシップ会議／ESD 活動支援センター／認定特定非営利活動法人日本ファンドレイジング協会／特定非営利活動法人日本病院ボランティア協会

◆ オプション企画＊交流会

前夜交流会　　2 月 26 日(金)　19:00～21:00
放課後おとな教室　2 月 27 日(土)　17:40～19:40
※参加費 無料／申し込み不要

オープニングセッション

タ イ ト ル **「越境」×「対話」×「共創」**

ねらい

私たちが人間らしく暮らすには、あらためて「自助、共助、公助」をどうとらえ、どんな社会を構想していくのかを問い直す必要があるのではないか。近年、日本社会に広がった「まずは自助を」という風潮は、孤立と格差を生み出してきた。コロナ禍で見えてきたのは、普通に暮らすことが孤軍奮闘になってしまう、という私たちの暮らしの“危うさ”だったのではないか。

この全体会では、多彩な登壇者のクロストークから、人々の主体的な参加による対等な連携・協力を生み出すコーディネーターの価値と可能性を、集会の起点として考えあう。

登壇者

登 壇 者

尾上 浩二さん
（おのうえ・こうじ）
認定 NPO 法人 DPI 日本会議
副議長

湯澤 規子さん
（ゆざわ・のりこ）
法政大学人間環境学部
教授

西川 正さん
（にしかわ・ただし）
NPO 法人ハンズオン！埼玉
常務理事

コーディネーター

早瀬 昇さん
（はやせ・のぼる）
社会福祉法人
大阪ボランティア協会
理事長

タイムスケジュール

14:10 開会あいさつ
14:15 登壇者自己紹介
14:25 登壇者からの提起とクロストーク
15:55 終了

全体会の内容

早瀬）趣旨説明。菅首相の発言で自助、共助、公助について注目されるなか、その関係と共助のありよう、さらにコーディネーションのあり方について議論していきたい。

【自己紹介（好きな食べ物とその理由）】

尾上）お好み焼き。大阪生まれ、大阪育ちで、車いす利用。中学から普通学校に通い、その帰り道、友人に誘われ、道草でお好み焼きを食べた。いろいろな具が入っていて、いろいろな人がいるから面白い、というDPIの目指す社会像にもつながってくる。

湯澤）私も大阪生まれ。菓子パンの袋入りのあんぱん。3姉妹で小学生の時、2歳上の姉が自分の好きなパンを買っていいよ、と言ってくれた。自分の小遣いで他人のために使うのはどういうこと？と思った。これが胃袋に他の人がかかわってくれる原体験。現在は胃袋から社会を見る、“うんこ”から社会を見る研究をしている。
西川）市民活動や地域活動をしている。遊びと学びの場づくり。三密の関係を作ることを試みた 20 年。好きなたべものは滋賀県高島地方の B 級グルメ“とんちゃん”（味噌だれの鶏の焼き肉）。肉を買うようになった頃の土曜の夜の一番のごちそうだった。
早瀬）私は親子どんぶり。中学生の時に亡くなった母と食べに行った思い出がある。

【「自立」と障害の社会モデル（尾上）】

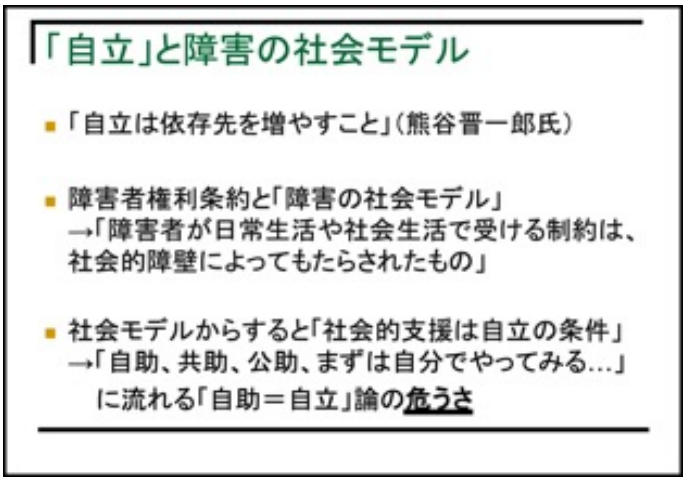
資料のインクルージョンについて。インテグレーションは障害や高齢者などをまとめて中に入れる考え方。インクルージョンは社会の中に、障害者や高齢者などの属性に関わらず、全ての人がまぜこぜに入っている、お好み焼き社会。DPIが目指す社会。

インクルーシブな社会を提唱したのが、「障害者の権利に関する条約」。日本は、2014 年に締結した。

私は、脳性マヒで最初、養護学校に通ったが、中学から地域の学校へ通った。大学に入った 18 歳から障害者運動に参加し、駅のエレベーター設置や、自立生活支援などに取り組んだ。

1975 年には、厚生省（当時）の通達で「1 日 4 時間以上介護が必要な障害者は地域生活ではなく、施設入所がふさわしい」と言われたり、駅のエレベーター設置を求めた回答として、大阪市交通局（当時）は 1978 年に「駅のエレベーター設置は、障害者の皆さんのためのものなので私たち鉄道事業者に求めないでください」と言われたりした。その後、大阪市交通局は反省され、現在は全国 1 位のバリアフリー化を果たしている。これが 50 年前のスタンダードで、それを変えてきた。

大きく変えてきたのが、障害者の自立生活運動。自立の考え方を「他の援助を受けないこと」から「支援を得ながらの自立」としてきた。熊谷晋一郎氏（東京大学）は、「自立は依存先を増やすこと」としている。依存先が1か所に限られていると、孤立や排除が生まれる。



「障害の社会モデル」では、「障害者が日常生活や社会生活で受ける制約は、社会的障壁によってもたらされたもの」。社会モデルからすると社会的支援は自立の前提、条件となる。「自助、共助、公助、まずは自分でやってみる」には、「自助＝自立」論の危うさがあり、50 年前に戻すのかと思う。

湯澤）子ども食堂で悩んでいたことに光が見えてきた。自立とは、自分だけでやっていくこととは違う、という点が発見。子ども自身が夕食を作ることで、自分のためだけでなく、周りをサポートできる。
早瀬）「自立」では「自律」＝自分で決められることが大切。熊谷晋一郎氏は、東日本大震災の際、車いす利用のため階段で逃げられなかった。階段に依存できない。依存策が多いことが大切だと気付かれた。
西川）実家のある湖西線には、エレベーターがなかった。父が障害を持っていて、露骨に駅に来るなと言われ

た。大学で東京に出て障害者運動に出会う。新宿駅に車いす 200 人でデモ。大パニックになった。
先日、理事をしているNPOが運営する学童でコロナ患者が出た。「肩身の狭い思いをしている。法人はどう考えているのか」と苦情が入った。「感染しようがしまいが、まず『同じ学童の仲間』と私たちは考えている」と答えた。デフォルト（初期設定）で仲間だと思えない社会になってきているのではないか、と思った。
大学時代、重度障害者の介助をしていた。良くも悪しくもとても人間臭い関係だった。それが制度化されると、介護は専門職のものとなり、誰でもかかわれるものとは遠くなった。こうしたシステム化をどう考えていけばよいだろうか。
尾上）インテグレーションは条件が合えば仲間に入れてあげよう。インクルージョンは最初からデフォルトで仲間。これが大切。介護制度は充実してきたが、制度の中だけでなく、豊かな人と人のかかわりも求めてきた。
早瀬）公助が弱い時代、障害者の当事者運動で公的な保障を求めてきた。しかし、一定程度制度が整備されてくると、当時の運動体が事業者化している。
尾上）ごちゃごちゃだから面白い。もう一度そういう状態を作っていきたい。

【ごはん食べた？「令和のフードパントリー」から考えたこと（湯澤）】

今日、お昼に何を食べた？（参加者にチャットに記入してもらう・・お好み焼き、カレー、そば、たい焼きとパン……）チャットに書いてもらうと見えなくても相手を近く感じる。

100 年前の屋台での飲食、日雇いの人のための食堂、たくさんの人が一緒に食べる。現在私は、子ども食堂、フードバンク、フードパントリーの活動にかかわっている。他人の胃袋を気遣ってきた。食から時代を見ると、3 つの社会で生きている。「公」「共」「私」。100 年前から「私」のエリアが増加している。学生に聞くとインスタグラムは「人の目にさらして、自分の心に食べさせる」という。

食べるシーンも「共食」から「個食」、高度成長期は「飽食」「崩食」「孤食」。今は「共食」「縁食」というのが出てきている。

今は「共在経済」を模索し始めている。今を象徴する言葉として、「毎日の普通の食事に誰一人困らない姿が見たい」「食に困らない世の中が夢」と学生が言った。ある留学生から「どうして日本では『ごはん食べた？』が挨拶にならないのか」と聞かれた。ごはん食べた？＝他人の胃袋を気遣う言葉。他者や世界とともに生きること。2007 年には「おにぎりが食べたい」と言って亡くなった一人暮らしの男性がいて、社会に大きな衝撃を与えた。

未来の一皿をどのように創るか。「誰かと、何かと、 共に在ることを感じられる」「ごはん食べた？と気軽に言える」「自助と共助と公助を一皿に盛りつける」「楽しくておいしくてつい食べたくなる」。そんなことができないか。

私の悩みは、子ども食堂。コロナで活動ができなくなった。そのためフードパントリーの活動をしている。届けっぱなしでいいのかという迷いが生まれ、「子ども自分食堂」として、子どもたちの心に作ってもらう活動を始めた。もらった食材を自分たちで調理する楽しみ、食べてもらう楽しみを味わった子どもは、大人になって

誰かに食べてもらう「誰でも食堂」を作るのではないかと思う。自助ではなくて、自立した子どもたちを育てる、私たちが公助や共助で支えていく。いろいろな団体が「越境」して、当事者である子どもたちと「対話」して、「共創」できるものがある。

フードパントリーに来た兄弟が食材を持ち帰り、どのような気持ちなのか。食材に、私たちが共に在る、応援している気持ちを込めたい。そこで、「こどもじぶん食堂新聞」を作ることにした。地域の小中学校の協力を得て、配っている。子どもたちの自立を「公助」と「共助」で支える仕組み。食べ物の作り方を載せて、子ども自身で作れるようにすると、作ったよとの声が。少しずつ伝わっている。

共に在る「共在」関係・世界・経済を考えていきたい。その時にコーディネーションは大切。

早瀬)「一皿に自助、公助、共助を盛り付ける」は大変示唆的な表現だ。
西川)焼き芋で仲間を作ろうというキャンペーンを 15 年やってきた。2000 年代に、保育が託児の産業化＝サービス化し、保護者は「お客さん」になり、保育者との間に壁ができてきていると感じていた。一緒に食べたらいいんじゃないかと思った。火を囲む、気持ちが開く。一緒に食べると無防備になる。その顔を見せ合うことで、「先生」ではなく「〇〇さん」になる。お互いに人として許せるようになる。湯澤さんの本に共感した。
尾上)私も「七袋のポテトチップス」を読んだ。社会史的なものと、一人一人の語りがリンクし、とても面白かった。高校時代に電子レンジが入ったなあ、などと思い返しながら読めた。自己紹介を考えていて、お好み焼きは好きではあったが、養護学校から地域の中学に移って知らない人ばかりで不安な中、友人がお店に誘ってくれた。誰とどのような関係性を築いていたか。誰かと何があったかを共に感じられる。食を紐解くことで自分の歴史を紐解くことができる。支援があって自立した食事体験を作っていく。
早瀬)お好み焼きは、みんなで取り分けて食べるということもあるな、と共感。食べることにこだわられた理由は？
湯澤)大きな社会の流れと個々の人間の魅力。食の研究のきっかけは、誰でも主役になれるテーマだから。チャットの向こうに個々の人間が見えてくる。食は楽しいもの、身近なもの。西川さんの焼き芋とか。
西川)食べ物は、良し悪しよりも、好きか嫌いか。誰も否定できない。好き嫌いの「好き」を認めるということは、そこにいてもいいと認めることなのではないか。

【コロナ禍で改めて共助の価値を考える(西川)】

共助は、あたたかいけどめんどくさい、めんどくさいけどおもしろい。あたたかいのほうは、人類学の知見で「贈与」と「交換」。「交換」は商品。相手は、誰でもいい。「贈与」は関係性を作るためのもの。「贈与」は、あたたかい。でも、ちょっとめんどくさい。「交換」は、お金で決済するので、気楽。でもちょっと寂しい。

フードパントリーをしている草場澄江さんは「食品を渡すのは、つながりをつくるため。相談には来なくても、食の配布だと来られる。毎回顔を合わせていると、本当に困ったときに連絡をくれる。行政に相談するのはハードルが高くても、あの人たちならと思ってくれる」と言っている。

「共助」の価値は、贈与によって家族以外に信頼できる人とのあたたかい関係をつくること、孤立の防止だ。子ども食堂やフードパントリーだけで経済的貧困は解決しないが、つながりはできる。それが人を支える。貧困そのものの解決は、労働と福祉のありようなど「公助」のあり方をふくめて、根本的に変える必要があることを押さえておきたい。

共助のもう一つの価値は、自治≒共有空間(コモンズ)をつくっていくこと。そこから遊びはうまれる。共助はめんどくさいけど、たのしい。

高度成長を経て、町中から子どもがいなくなった理由は、①サービス産業化と制度化。児童館や公園などの施設ができて、その施設に「収容」されるようになったこと。②ゲームに象徴される子どもの時間の市場化がすすんだこと＝「私」の空間の広がりによるコモンズの消滅。社会学者の宮台真司さんは「システム社会が広がって、生活世界が減ってきた」としている。

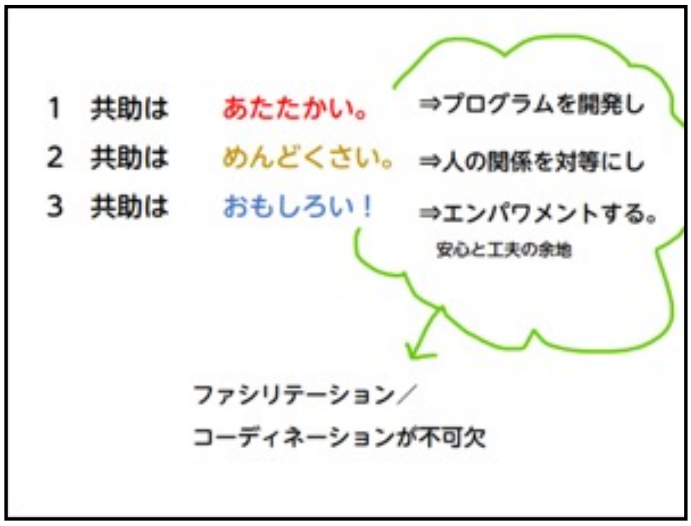
システムが整うとコミュニケーションがなくなる。住民間で折り合いがつけられなくなると役所に苦情が行く、苦情は禁止を生む。直接のコミュニケーション、相対でやり取りする社会すなわち対話による自治を復活していかないと、遊べる社会にはならない。

プレイパークに通う小学生の言葉で「おれ、ここの大人は信じれる。なんでダメなの？って聞いたときに、自分の言葉で考えをぶつけてくるから」。校則をなくした世田谷区桜丘中学校の西郷孝彦校長の言葉では「校則をなくして急に増えたことがある。それは『議論』」。これも手間がかかってめんどくさいが、そこからたのしいが生まれてくる。

「共」の世界を拡張できるのか？　コロナ禍で命令されて閉めた施設はたくさんある。自主的な判断をした施設はどのくらいあるのか？　主体的な判断には対話が必要。

共助は人の関係をつくり、対等にし、人を元気にする。そんなコミュニケーションによる場づくりには、コーディネーションが鍵になる。システム化がどんなにすすんでも、「誰がなんと言おうと、君の代わりは君しかいない（ドラマ「あまちゃん」の名言）」と誰かが言ってくれていると感じられる「新しい生活様式」をつくりたい。

早瀬）この社会はシステム化が進んでいる。レストランチェーンでは、本当はそこで作っていない。工場で作って、レンジでチン。すると、そこにいるのは誰でもいい。アルバイト店長になり、店の味ではなく、チェーンの味になってゆく。



尾上）西川さんの DPI 時代と重ねて聞いていた。「めんどくさいけど、おもしろい」は、まさに障害者運動。障害者問題というのは具体的なAさん、Bさんの問題としてとらえられるか。今の介護は規格化され、ルーティンの介護はできるが、1990 年代の全身性障害者介護人派遣事業は、〇〇さん専属の介護で人を派遣した。個別の関係性での介護。障害者自身が介護人を選べた。ただ単に相互の関係性の中で面白くやっているだけでなく、自治体を動かし公的な制度をつくる、共助が公助のあり方を変える、ということをしてきたのが、1990 年代の障害者運動の面白さ。それが全国に広がるものなのかと思っていたのだが、自治体レベルでの公助が変わるのと、国の制度の中に入れられるのとは、これほど違うのか。この 20 年間をどうとらえなおすのか。めんどくさいけど、おもしろいをどうしたら復権できるのか？

西川）めんどくさかったから、システム化に走ったということ。でもそれは、人間が人間に向き合えなくなっていくということでもある。例えば、レジの人に話しかけてみるとか。本音ポロリ運動。システムは強固に見えるが、少し動くだけでほころびる。コロナはチャンス。前例ゼロでどうしたらいいかわからない。今、普通の修学

旅行はできない。福井の中学校で県内で自分たちで企画して実施し、面白かったというNHKのニュースがあった。「自分たちで工夫してくれたということは、これから何が起こるかわからない中で、みんなと協力して作っていくことが経験できたことはよかった」と校長先生が言っていた。
早瀬)ほころびていくことを楽しむ！
尾上)ポストコロナ、今後の社会を考えていく上でのヒントをもらった。
湯澤)コロナの中で大学教育が問われた。大学もサービス産業化。学生の貧困、社会的な孤独。西川さんのことが思い浮かび、「遊べ！」と思った。学生にラジオをやろうと呼び掛け、立ち上げ、任せた。学生に任せるとこんなに面白いのか。大学の産業化と制度化をもっと自分たちのもとに引き寄せる。学生たちがやりたいことを応援していく時期。
早瀬)西川さんは、メールだけの授業をやったとか。
西川)30 人くらいの学生にメールを送り、感想をもらい、まとめてまた送る、それについての感想がまたもどってくる。15 回ぐらい続けたら 70 万文字になった。匿名でやってみた。人のことを気にせず、まず自分を表現してと。「こんなに面白い授業はなかった」との声をたくさんもらった。コロナ禍の中で自宅に居なければならない学生同士が励ましあうことになっていた。本来は、リアルの対話であってほしいが、小中高で嫌な思いをして、表現してもいいことはないという経験をして、大学に来ているということなのではないか。

早瀬)3 人の話を受けたうえで、コーディネーションについて考えていきたい。コーディネーションは、対等化して、つなぐ行為の意味。障害者に関わる営みは、一見、対等な協力関係にしにくいがどうか。
尾上)障害者運動の一つのテーマは、脱専門家コントロール。障害者は、医療専門家の下で一生過ごす必要はない。人生の主体者としての復権。障害者が他の障害者を支援したり、他の社会活動に参加したりする。役割を固定されないように、少しでも流動性のあるものにしようとしてきた。公助のあり方しだいでは、共助はシステム社会に飲み込まれる危険性がある。脱専門家。役割が固定化しない、動きのある関係性をどう作っていくか。
早瀬)コーディネーションにも言えるポイントだ。
湯澤)ボランティアが生き生きと活躍できる場を作る必要がある。食の歴史では、1918 年にコメ騒動があり、対処療法ではあるが、企業寄付などで公営食堂が作られた。大原孫三郎氏(クラボウやクラレの創業者)は、女工の人格向上主義を提唱した。女工の胃袋のケアを考え直すべきと言っていた。ただし少数派だった。短期的ケアと長期的ケアの両方が必要。両方のコーディネーションが必要。
西川)短期的には、「場を作る」こと。大学時代、不登校になっていて、自主夜間中学を手伝っていた。中学生から「来週、来るよね？」と言われていた。お互いに必要としていた。長期的には、システムが整っていくほどバラバラに暮らし始めるので、「どう混ぜていくか」が課題。それが、「新しい生活様式」だと言いたい。システム・制度の枠を超えていく。協働、越境？
早瀬)変な意見をおもしろがる場づくりが必要。その点、障害者の力は強い。
尾上)時代の流れの空気に流されることなく、行動できるか。これまでの日本で、共助が市民の自主的な共助足りえるのか、何度か問われることがあった。1930～60 年代の「無らい県運動」では、公と住民がハンセン病患者の排除をしていた。1948～96 年の「優生保護法」では、地域の民生委員が善意で不妊手術をすすめた。共助だから素晴らしいというのではなく、排除になっていないか、新しい価値をつくることになっているかが大事な点。日本は官民一体になると排除的な傾向につながる。コロナ禍でも同じ。新しい価値を作るよう

になっているのか、市民の自主的共助なのかが問われる。共創、市民が共に創ることの大切さがある。
早瀬)『ボランティアとファシズム』という本がある。ボランタリーなものがすべて良いわけではない。人権感覚が問われる。日本では同調圧力も強い。
湯澤)「共に」が、何がなんでもになると排除。ゆるやかに共にいられるというのはどういうことか。「縁」でゆるやかな、共にある社会を下支えしていく。
早瀬)西川さん、どう混ぜていくか。
西川)世の中の動きに便乗する(笑)。例えば、地元の中学校で、地域の人と中学生が大人数で三密でおしゃべりをするワークショップをやっているが、その導入時は、「文部科学省のコミュニティスクール推進」が学校に課されていたので、それを利用した。今なら、オリンピックでボランティアとか。名目、大義名分をうまく見つけて、使いながら、こちらがやりたいことをしていく。
早瀬)巻き込まれながら巻き返す！　最後に一言ずつ。
尾上)「越境」の面白さがあった。意外にどの分野も共通な悩みがある。新しい価値を共に作っていきたい。
湯澤)居心地のいいシンポジウムだった。この場が混ぜる場になっている。仲間であるデフォルト感がある。生活世界をどう取り戻すか。システムをしたたかに利用しつつ、開かせる。コーディネーターのしたたかさ、柔軟さ。
西川)システム社会でサービスはあふれている。学童も託児したいからというシステムで出会う。でも出口がシステムではまずい。障害児も一緒にいる、遊ぶことで、いるのが当たり前となる。出口は、コミュニケーションによってなりたつ関係、コミュニティであってほしい。そのためには、コーディネーションが必要。
早瀬)コーディネーションを考えるうえで、重要な示唆をもらった。社会を変える原動力は、当事者であり、市民。どう混ぜるかというときには、ネットワークはフットワークの足し算。フットワークのいいコーディネーターが、人々を混ぜていく重要な担い手になると思う。皆さん、ありがとうございました。

参加者の声
• 社会の状況をしっかりと把握でき、共創について考えを深めることができた。湯澤さんの研究分野から社会を眺めることは斬新であり、興味深く拝聴した。 • とても面白いパネリストの組み合わせで、それぞれの視点から「共助」のキーワードにつながる学びがあり、さすがだなと感じました。 • やはり社会に参加するため、混ぜるためにはコーディネーターが大事だと感じましたが、そのコーディネーターの質やその人の持つ価値観がますます大事だと感じました。 • システム化する社会は、求められ作られてきた側面もあると思います。求められて作られた反動で、失われたこと、面倒なことがどれだけ大切だったことなのか。手間がかからないことだけが是とならない社会を発信しつづけたいと思います。 • 越境・・・登壇者3人さんのそれぞれの活動視点からの話が、これまでいろんな団体に聞いてきたことにすべてつながっていくと感じた。 • コーディネーションの大事なところは、楽しんでいける場づくり。巻き込まれながら、混ぜ込んでいくこと。まさにお好み焼き！！システム社会の中でさまざまな分野の方々が一緒になって何かができる機会を設けることが、やはり私たちのできることなのかもしれない。 • いろんな分野の方からのお話がきけてよかったです。社会の構造や前提となることをしっかり認識したうえで、コーディネートしていく必要性を感じました。 • あらためて「共助」の意味、意義を考えることができた。とりわけ、「コロナ禍」のなかで分断が起こっている中、「混ぜること」「越境すること」で見えてくるものがあるかもしれない、という期待を抱けた。 • 楽しく有意義な時間でした。越境とごちゃまぜと「いいよ」「いいよ」のお互いを認め合える関係の中で、自分らしさを誇れる社会をコーディネートしていきたいな～と感じました。どうやって混ぜようかな～？ワクワクしてきました。 • まさに今回の実践研究集会のテーマがわかりやすく、ゆるりと伝わってきました。コーディネーターとしても人としても考えさせられることがたくさんありました。まずは混ざりに出向いていきたいです。コロナ禍に翻弄させられないように。本当にありがとうございました。オンデマンドでもう一度楽しませていただきます。 • 「巻き込まれながら、巻き返す」そのようにコーディネーションしながら、最終的にはインクルージョンされた社会の実現を目指していく、その方向性が見えてきました。システム社会の中で具体的なアクションを起こしていくには、ある意味で「戦略的な」「見せ方」も大事なのだろうと思います。
企画担当者のコメント
「まずは自助」というワードがあちらこちらで聞かれる今、あらためて「自助・共助・公助」の意味を問い、自助とはなにかを整理し、共助という言葉に含まれる本来の価値や意義を掘り下げる場となった。登壇者それぞれの問題意識と実践研究を素材に、コーディネーターが他の登壇者の視点をクロスしていく進行はとても刺激的で、示唆に富み、集会のオープニングに相応しい内容だった。
企画担当者
唐木 理恵子（紬ワークス）　西川 正（ハンズオン！埼玉）　早瀬 昇（大阪ボランティア協会） 後藤 麻理子（日本ボランティアコーディネーター協会）

分科会番号 A － 1

タ イ ト ル **多文化共生（国際交流協会）×地域福祉（社協）**

サブタイトル **変化が加速する僕らの暮らし**

ねらい

コロナ禍で、外国人留学生や技能実習生等の生活の実態がクローズアップされている。社会福祉協議会と国際交流協会はその支援活動に取り組んでいるが、両者はそれぞれが密接にかかわる領域で実践する組織でありながら、お互いの実態は意外と知らないという声を聞くことも…。両者がよりよく知りあうためのちょっとした参加の工夫を、実際の事例を紐解きながら共有していく。異なる領域の融合が生み出す新しい支援の仕組みの必要性が加速している。

登壇者

事例発表者　菊池 哲佳さん（多文化社会専門職機構、仙台多文化共生センター）
事例発表者　長谷部 治さん（神戸市兵庫区社会福祉協議会）
聞き手・進行　三田 響子さん（相模原市社会福祉協議会）

参加人数

37 名

タイムスケジュール

13:00 開始～挨拶、趣旨説明
13:20 事例発表①（菊池）
13:35 事例発表②（長谷部）
13:45 聞き手を交えてトーク
14:30 ブレイクアウト「僕らが混ざるには」（4人1グループ）
14:40 ブレイクアウト中の話題をシェア
14:50 まとめ
15:00 終了

分科会の内容

菊池哲佳さんより事例発表①

国際交流協会（国流・協会）…組織形態やミッションは様々。その中でも「地域国際化協会」と呼ばれる組織は、自治体の国際化施策の一環で設置されたもので、全国に62の協会がある。地域国際化政策の3つの柱は「国際交流」「国際協力」「多文化共生」。外国人の増加・定住化に伴い、全国の地域国際化協会の事業は「多文化共生」推進に軸足を移している。社協との連携は 2011 年の東日本大震災が契機となった。災害多言語支援センターでボランティア活動を志願する外国人に災害ボランティアセンターを紹介した経緯から、当時は「社協＝災害 VC」のイメージだった。現在のコロナ禍では、主に外国人留学生相談から生活困窮の相談が多数寄せられている。仙台市社協と連携し、特例貸付の案内等を行っている。

長谷部治さんより事例発表②

社会福祉協議会（社協）…民間の社会福祉活動を推進することを目的とした営利を目的としない民間組織。S26 年制定の社会事業法（現：社会福祉法）に制定。昨今実感する地域社会の変化…少子高齢化人口減少単身世帯の増加。住民票上は単身でも、同じ部屋に複数人で住んでいる「複単身」の増。コロナ可での生活苦で地域・家庭の支えあいの機能縮小はさらに浮き彫りとなっている。制度の狭間というより隙間に落ちてしまい

困窮する人が増えている。

神戸は外国人市民の多い街。1995 年阪神淡路大震災の時に緊急時に言葉が通じず、必要不可欠な情報を得られず多くの人が心細い思いをした。また、避難先で文化の違いからおきる不便もあった。そこで、多言語での情報発信を行う「エフエムわいわい」を立ち上げた。2011 年東日本大震災では福島県社協の広報づくりに携わり、その内容をエフエムわいわいを通じて多言語で発信。「福島の状況を知ることができた」という反響があった。2020 年5月外国人留学生からの困窮相談が急増。貸付制度の相談だけではなく、ビザの取り扱いや日本語学校の実態、住所概念の違い（かなりの頻度で引っ越しを行う等）に直面する。

聞き手を交えての「国流×社協」

交流の視点は以前からあったが、生活者としての外国人を住民として受け止めていないのでは？という状況がまだある。貸付相談の中から見えてきたものは「思っていた地域の状況と実態が違う」こと。外国人の相談の質の変化もある。ツールの外国語化はされており、SNS で調べるなど、同胞のネットワークで様々な情報は手に入るようになっているがそこで聞けないような込み入った相談（例えば国際離婚についてや詐欺について）から、福祉分野での実践も増えている。

まとめ

協働を生み出すための3つの方法は ①共通の作業を一緒にすること（分担しすぎない）、②共通の理念を持つこと（言葉にする、文字で共有する）、③共通の敵を持つこと（禁じ手でもあるが…）。

外国人の問題から日本社会の問題が見えてくることもある。日本語学校や日本語教室との連携なども必要であるし、そもそも国籍に関係なく、困っている人たちに寄り添った、頼りになる組織でありたい。

参加者の声

- 見えにくい（全国ニュースでは流れない）社会課題が提示され、意識が引き締まりました。
- 地域福祉という以前に、普段から見える関係性づくりが必要かなと感じました。外国籍の方々にとって、平時は困難を感じなくても、災害や緊急時では実は困りごとのオンパレード。真っ先に相談が得られるようなコミュニティをつくらなければ。
- まざっていくことが大事、まずはそこからと再認識しました。ありがとうございました。

企画担当者のコメント

- 企画担当者の私自身にとっても社会福祉協議会のシゴトを知る有意義な機会となりました。参加者からもたくさんのコメントをいただき、関心の高さがうかがえました。これを機にさらに今回の議論を深めるとともに問題解決に向けた連携・協働につなげていければと願っています。（菊池）
- 外国人住民の地域での暮らしを改めて意識しながら「混ざる」仕事をしていきたいと思います。（三田）

企画担当者

菊池 哲佳（多文化社会専門職機構）

長谷部 治（神戸市兵庫区社会福祉協議会）

三田 響子（相模原市社会福祉協議会）

分科会番号 A － 2

タ イ ト ル **福祉×環境**

サブタイトル **自然の中で育む、新たなコミュニティのつくり方**

ねらい

福祉と環境、実は親和性の高い掛け合わせができる分野だ。本分科会では、公園や里山をフィールドに、高齢者や障害をもつ方、児童養護施設の子どもたちが、自然の中で一緒に作業をすることを通じて新たなコミュニティをつくっていく、そんな事例を紹介する。環境分野の、荒れた里山に手を入れたい、一緒に活動する人を増やしたい、という想い。福祉分野の、地域の色々な人と交流する場がほしい、のびのび身体を動かせる場がほしい、という想い。分野の垣根を越えて、お互いできることを持ち寄ることで、地域の課題も解決するのではないだろうか。

登壇者

事例発表者　角屋 ゆずさん(一般財団法人世田谷トラストまちづくり コーディネーター)
事例発表者　堀崎 茂 さん(NPO 法人東京里山開拓団 代表)
コーディネーター　鹿住 貴之さん(認定 NPO 法人 JUON(樹恩) NETWORK 理事・事務局長)
矢島 万理さん(公益社団法人国土緑化推進機構政策企画部)

参加人数

44 名

タイムスケジュール

13:00 開始～挨拶、趣旨説明
13:20 事例発表① 世田谷トラストまちづくり 世田谷区立次大夫堀公園内里山農園
13:50 事例発表② 東京里山開拓団
14:20 ディスカッション、質疑応答(角屋さん、堀崎さん、鹿住さん、矢島さん)
14:50 角屋さん、堀崎さんから最後に一言ずつ
15:00 終了

分科会の内容

事例発表① 世田谷トラストまちづくり

「世田谷トラストまちづくり」では、世田谷区で区民主体による良好な環境の形成、参加・連携・協働のまちづくりを推進・支援している。世田谷区は住宅都市だが、公園、農地など多様で良好なみどりが残っている。今回は、空間(場)×テーマ型コミュニティへの支援の事例として、世田谷区立次大夫堀公園内里山農園での活動を紹介。「人にも生きものにも優しい農園をいっしょにつくりませんか？」をコンセプトに、子どもの食育や環境教育、障害者もそうでない人も、誰もが一緒に楽しみ活動できる農園づくりを 2019 年から始めている。これまで様々な住民参加型ワークショップにより、参加しやすい仕掛けをつくってきた。例えば、車いす利用者でも畑作業ができるように、建築家、大学、木材加工会社と連携し、レイズドベッドを制作。また地区の地域包括ケア支援団体へのヒアリングを行うなど、日ごろから福祉分野とゆるやかに情報交換を行っている。地域ネットワークを生かして、多様な主体を巻き込み課題解決につなげている。

事例発表② 東京里山開拓団

東京八王子の里山で活動する「東京里山開拓団」では、荒れた山林を児童養護施設の子ども達とともに開拓し、ふるさとを自ら創り上げる試みを行っている。立ち上げ当初は、児童養護施設に出向くも相手にされ

ず、東京ボランティア・市民活動センターに相談し、紹介してもらったことで活動が展開できた。子ども達に何か提供するのではなく、里山の開拓自体を共に楽しむことで、トラウマを抱えた子ども達も心を開いてくれている。退所後も活動に参加してくれる子ども達もいる。荒れてしまった里山での活動は、自然相手の活動ゆえに自己満足的な活動になってしまうこともあるが、子ども達と共に行うことで、子ども達の笑顔とふるさとをつくる、という社会課題の解決の場にもなっている。また、学生支部を立ち上げ、大学生が施設を訪問したり、一緒に里山での企画を考えたりするなど、子ども達との関わり方も深化している。最近では、企業向けの里山研修事業や、全国の里山を探せるサイト運営も展開。様々な人たちが里山に関われる場づくりを精力的に取り組んでいる。

ディスカッション、質疑応答

　コーディネーター2 人が、講演の内容を掘り下げながら、参加者からの質問にも答えてもらった。

〇分野を超えた活動のきっかけは？

(角屋)トラまちで行っていた空き家の活用やファンド事業で、地域課題が集まっていた。その時必要性を感じ、社協に聞き、福祉分野ともつながった。それぞれの職員に紐づいている関係のため、どう他のスタッフにつなげるかが課題。

(堀崎)当初は信用の壁、常識の壁があった。荒廃した里山は危ない、というイメージや、認識の違い。相談した中間支援組織の担当者が共感してくれるか、という点も分野を超える際ポイントとなった。

〇福祉分野とのゆるやかな関係とは、具体的にはどんな感じか？

(角屋)地域包括のネットワークにトラまちが入っていなかったが、そこに課題があるとわかり話を聞きに行った。誰でも支援を必要な時があるため、福祉分野の声を聴きながら、地域とつながる場をつくっていきたい。

参加者の声

- まちづくり、地域の課題を解決するには、福祉だけ、環境だけ、といったものではなく、やはりまざりあって掛け算でやっていくことが必須だなということを実感しました。
- 「自然」というもともとある資源を活用し、そこに集まる人たちの各々のパワーや交流から生まれるものを成長させていくというプロセスが面白く、わくわくできるお話でした。

企画担当者のコメント

　公園や里山など身近な自然を舞台に、様々な人が関わり、楽しむこと、それを実践されているお二人のお話は、分野にとらわれない素晴らしい活動だな、と改めて感じました。分野を超えてというと少し難しそう、と思うかもしれませんが、その地域や今の社会にとって必要なことは何なのか、しっかり見つめ行動することで、いろいろな人たちとも連携できるのだと思います。ありがとうございました！

企画担当者

鹿住 貴之(JUON(樹恩) NETWORK 理事・事務局長)
熊谷　紀良(東京ボランティア・市民活動センター)
矢島 万理(国土緑化推進機構政策企画部)

分科会番号 A － 3

タ イ ト ル **地縁組織×災害救援 NPO**

サブタイトル **災害勃発！そのとき「地元」と「よそもの」は有機的協働を目指せるのか？**

ねらい

災害勃発！そのとき、私たちは何ができるのだろうか？被災当時者としてできること。外部支援者としてできること。それぞれの立場からどのように有機的協働を目指していくのだろうか？実際に被災を体験し避難所運営などにも従事した地元団体の担当者。そして外部から被災地に入り多くのボランティアと共に支援活動に従事した災害救援 NPO の担当者。令和元年、長野で起きた「そのとき」を振り返りながら、またこれから起こるかも知れない災害発生時の自助・共助・公助の方向性について語り合う。

登壇者

事例発表者　山﨑 博之さん（長野県社会福祉協議会　総務企画部企画グループ主任）
事例発表者　明城 徹也さん（全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD）事務局長）
ファシリテーター　杉浦 健さん（共働プラットホーム）

参加人数

42人

タイムスケジュール

13:10 開始～挨拶、趣旨説明
13:20 事例発表①（山﨑さん）
13:40 事例発表②（明城さん）
14:00 ブレイクアウト　過去の災害支援体験と、そのときに感じた課題
14:30 ブレイクアウト中の話題をシェア
14:50 まとめ
15:00 終了

分科会の内容

この分科会のテーマは「支援される側と支援する側」のギャップをどのようにして取り除くかである。

災害現場において、立場の違いが目指すべき協働を阻んでいることがある。それぞれの役割を明確にし、強みを生かし弱みを補完し合える関係性を築くためのさまざまなヒントを、被災地で被災しながらも支援体制を構築し、復旧・復興の道を作った山﨑さん、そして災害支援 NPO として支援者と被災地をつなぐコーディネーションを実践してきた明城さんに報告をいただいた。

1. 事例発表①（山﨑さん）

2019 年 10 月に日本を襲った「令和元年東日本台風」は、長野県地方においても各地に甚大な被害をもたらした。11市町村で災害ボランティアセンターが開設され、活動者は72，989名（うち長野市64，705名）に及んだ。

エリアコーディネート・コミュニティマッチングを中心に各サテライトで行われてきた「被災者支援活動」の状況や把握している「被災者の生活状況」の全体像を把握するため様式を統一。現地にてボランティア活動を通して直接住民にアプローチが可能となり、たくさんのボランティアの方により地区との信頼関係が築かれることで地域ニーズを丁寧に拾うことができた。

さらに、各種のニーズ解決に向けた多様な団体との連携・協働を軸とする「One NAGANO」を進めることで、自らコーディネーションに参画する住民のエンパワメントや、住民主体の地域活動の再興・新たなまちづく

りの展開の原動力を醸成することができた。

2.　事例発表②（明城さん）

JVOAD のミッションは、災害時においては「災害時に支援のモレ・ムラを無くすコーディネーション（調整）を行う」。平時においては「コーディネーション（調整）の基に支援が行われるための環境を整備する」というものである。以後、頻発する自然災害の支援活動において、被災者ニーズに対して支援のヌケ・モレのないよう「NPO・企業等の支援のサポート」と「三者間の支援調整」を行ってきた。

被災者支援活動としては、避難所運営、子どものためのプレイルーム運営、物資の配布、仮設住宅支援から水害の際の床下対応や台風、地震の際の屋根の対応（ブルーシート張り）に至るまで、さまざまなサポートを担っている。

多様な支援主体間の連携を推進し、迅速かつ適切な対応を促すことで、関係者間で情報共有し、単体では解決しない課題を調整、被災者支援活動に関する困りごとの解決につなげている。

3.　ブレイクアウト

過去の災害支援体験と、そのときに感じた課題を共有した。以下のような意見が出た。

- 経験なしで災害ボラ支援に入った。支援する側だったのに受け身になってしまい反省。
- 地元のボランティア団体などが、普段どのような活動をしていて、災害時にどのように手を組んで活動できるかを知る必要がある。
- 災害ボラセン等を通さずに地域で活動する人もいる。実際活動はできると思うがトラブルが心配。
- 今災害が頻発している中で大学（と大学生）としてどのように災害支援を行うかは今後の検討課題。
- 外から災害支援に入った際に現地の様子が分からないことが多いので地域住民の案内は有効。
- 地域でボランティアを入れて良いのかどうか抵抗のある中で被災した地域の地元の方がボランティアセンターといかにしてつながるか連携がとれているか、日頃の顔の見える関係性づくりが重要。
- 西日本豪雨の時にボラセンの立ち上げに自治会長を呼んだと聞いた。地元のニーズを自治会長が吸い上げる仕組みは有効だ。
- 日頃職員間での災害時の対応については話しているが利用者を含めた訓練等を考えることも必要。

参加者の声

- 中間支援組織がいるおかげで、そして多様な支援団体がいるおかげで、より被災者に寄り添った支援ができてきたと思います。しかし、それらが細やかに、高度になればなるほど、ニーズも多様化、複雑化していくし、人も社会も変わりますので、完成形はないのだろうと思います。
- 日頃からの顔の見える関係性が地域の方も、支援者同士も大事だなと改めて感じた分科会でした。支援者同士の日頃からのネットワークがすでに各地であると思いますが、そこの情報をまずは得られるように積極的に情報収集したいと思いました。

企画担当者のコメント

全体的に時間が足りなかった。報告者と参加者のコミュニケーションの機会が少なく、情報共有ができなかった。事前により具体的なテーマのキーワードを提示するなどの工夫があるとよかった。災害分野のニーズが高いことが再確認できた。加えてコロナ禍における災害支援という切り口は大切なテーマだと感じた。

企画担当者

明城 徹也（全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD））
長谷部 治（神戸市兵庫区社会福祉協議会）　　杉浦 健（共働プラットホーム）

分科会番号 A － 4

タ イ ト ル **「地域社会」×「若者」＝「明るい未来」は思考停止？**

サブタイトル **多様な人財が集まる地域となるために必要なコーディネーションとは**

ねらい

地域課題解決のために、若者に関わってもらうための取り組みが全国のいたるところで実践されている。大学のゼミ単位や NPO、自治会、行政が主催するボランティア活動、地域おこし協力隊など、その形は様々である。持続可能な社会を創って行くためには、多様な人達がつながり、参加する場は必須であるが、場を作っただけでは、持続性は期待できない。この分科会では、地域住民と若者が持続可能な関係性を構築しながら協働するためのコーディネーションについて考える。

登壇者

事例発表者　中井 章洋さん(茶舗円通、 NPO 法人わづか有機栽培茶業研究会 理事長)
事例発表者　植田 修さん(和茶園、 ほっこりサークル 代表、 和束(わづか)町移住呼びかけ人)
事例発表者　開澤 裕美さん(中央大学ボランティアセンター コーディネーター)
進行　竹田 純子さん(龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター コーディネーター)

参加人数

41 名

タイムスケジュール

13:00 開始～挨拶、趣旨説明
13:15 和束町の紹介・和束とボランティアのかかわりについて
13:30 事例発表者に進行役から問題整理のための質疑応答
13:55 グループワーク
14:15 グループワークの話題の共有
14:20 参加者と事例発表者の質疑応答
14:45 まとめ
15:00 終了

分科会の内容

オープニングで、この分科会を企画した意図、問題意識を伝え、今回の事例の地域を紹介した後、その地域と若者とのかかわりについて事例紹介。グループワーク、事例提供者と質疑応答、最後にまとめを行った。

1. 和束町はどんなところか

京都の南に位置し、茶業が盛んな町。人口 4,000 人弱で少子高齢化と過疎化が進み、茶業の縮小がさらなる人口流出を招いている。そんな中、町の未来を考え、地域の特徴を活かして交流人口アップを模索してきた。例えば、京都府景観資産第1号に地区登録 (H20.1.24)や NPO 法人「日本で最も美しい村」連合に加盟といったことである。こうした取り組みで、多様な人が来る素地を作った。1998 年に京都大学の学生達と交流の機会があり、援農バイトなどの受け入れが始まる。ボランティアの受け入れは 2000 年から始まり、当初はボランティアの受け入れに懐疑的であったが、コーディネーターとの話し合いやプレキャンプなどを通して、少しずつ理解が進み、ボランティアとの協働が始まった。

① 和束町でボランティアを経験し、移住した人に「和束のどんなところに魅かれたか」
② 地域で受け入れ側に「ボランティアとかかわる時に意識していること」
③ 送りだし側に「和束町との出会い、ボランティアの受け入れが始まるまでの経緯」等の事例紹介

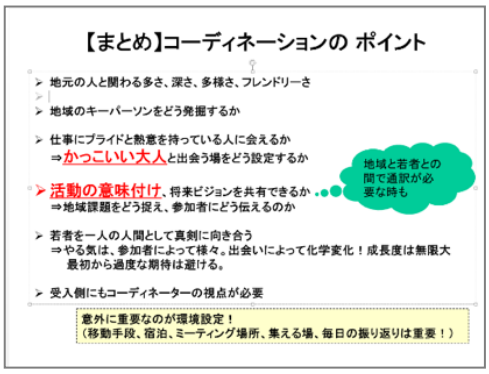
2. グループワーク

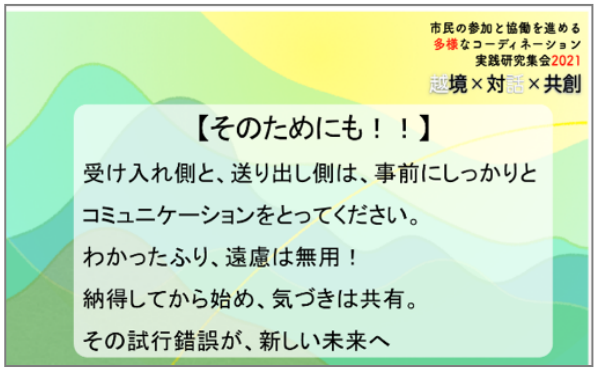
事例を聴いての感想や質問についてグループで話し合った。（質疑応答）

- コロナ禍を受けて現状はどうなっているのか？その工夫
  コロナ禍で町の宿泊施設などが使えず、活動は止まってしまっているが、個人的には LINE などで交流。
- ボランティアとのかかわりについて（叱り方等）
  ずるいことは許さないようにしている。人として間違ったことをしている時はけっこうきついことも言うが、そのあと、関係が深まることもある。危険なことをしたり（作業の中で怪我をしたりする可能性があるとき）は丁寧に説明して、分かってもらえるようにしている。
- 活動に批判的な人もいたのでは？
  茶業をしている農家がほとんどで、横のつながりが強い。そのため、一旦受け入れを決めると協力を得やすい。多様な人が出入りすることによって化学変化が起こり、茶づくりにプライドを持つ人が増え、農家民泊など新しい取組も始まった。

3. まとめ

地域に出るボランティアは人につく。いかに地元の人と関わる機会を作るのかがポイント。若者が地域に惹かれるのは、仕事にプライドと熱意を持っている「かっこいい大人」との出会いが大きい。そのためにも「地域のキーパーソンをどう発掘」「地域の人と出会う場」をどう設定するかも大切。また、「活動の意味付け、将来ビジョンを共有できるか（地域課題をどう捉え、参加者にどう伝えるのか）」や「若者を一人の人間として真剣に向き合う」ことが大切。若者のやる気は様々。出会いによって化学変化が起こり、成長度は無限大であるが、最初から過度な期待は避けることも大切。受入側にもコーディネーターの視点が必要で送りだし側と十分なコミュニケーションをとっておくことが重要である。





参加者の声

- 受け入れ側、送り出し側、参加者側それぞれの視点から同じプログラムをみることができたことがよかったです。受け入れ地域自身が「ボランティアを受け入れる魅力や価値に気づけるようになること」が、地域の活性化にもつながるのだと思いました。
- 受け入れ側、送り出し側、元参加者で移住された方と三者からのお話がそれぞれ聞けて、よかったです。受け入れ側と送り出し側の事前の話し合いが大切だと、実感しました。

企画担当者のコメント

時間が足りず、深く掘り下げることが出来ないところもあったが、受け入れ側、送りだし側、参加者側からの視点から地域に関わることについて考えることが出来たのではないかと思っている。

今回のテーマには関心の高い人が一定数いるだろうし、まだまだテーマにできそうなトピックもたくさんあると感じた。次回はもう少しテーマを絞ったほうがよいのかもしれない。

企画担当者

開澤 裕美（中央大学ボランティアセンター）　　竹田 純子（龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター）

分科会番号 A － 5

タ イ ト ル **生協×社協＝競争？共創？**

サブタイトル **連携で地域福祉を進めよう！**

ねらい

食を中心とした事業を展開し助け合いがベースとなっている「生活協同組合」は、現在では子育て、高齢者など幅広い福祉活動を展開している。もともとはメンバーシップの組織だが、近年は地域づくりへの参加を更に進めている。一方、地域での福祉活動は、「社会福祉協議会」が社会福祉法人や市民活動団体などと担って来たが、今後ますます多様な組織の協働が必要となってくるだろう。この分科会では、生協と社協を中心とした地域福祉組織との越境、対話、共創について考えた。

登壇者

事例発表者　徳永 雄大さん（長野県社会福祉協議会まちづくりボランティアセンター 主事）
事例発表者　中谷 隆秀さん（長野県生活協同組合連合会 事務局長）
事例発表者　藤井 智生さん（生活協同組合コープこうべ第2地区本部 マネジャー）
事例発表者　小薮 真彦さん（西宮市社会福祉協議会 生活支援コーディネーター）
コーディネーター　文珠 正也さん（一般社団法人日本協同組合連携機構 連携推進マネジャー）

参加人数

37 名

タイムスケジュール

13:00 開始～挨拶、趣旨説明
13:15 社協とは・生協とは
13:25 事例報告① 長野県（長野県生活協同組合連合会×長野県社会福祉協議会）
13:45 事例報告② 兵庫県（生活協同組合コープこうべ×西宮市社会福祉協議会）
14:05 ディスカッション、質疑応答（事例発表者、コーディネーター）
14:50 まとめ～終了

分科会の内容

1. 事例報告① 徳永さん×中谷さん

長野県版生協×社協のきっかけは「長野県災害時支援ネットワーク」。災害ボランティアセンター運営者研修に一緒に参加した生協、社協と、NPO センターの主催により災害時の連携を考えるフォーラムを開催。企画会議を重ねるうちに、お互いのことやどんな思いでいるか、何ができるかを知ることができた。翌年にはメンバーを拡大してネットワーク会議をスタート。依頼文や旅費支給はなし。会議は全員が積極的に発言するというルールの中で、ゆるく・強靭な関係性をつくることができた。ネットワークの成果は、支援の幅を広げることができる、平時の連携が有事の際のスピード感につながること。生協の強みは、世帯組織率が高く、生協の課題は地域の課題。トラックが多いなど組織としての大きさがある。社協の強みは個別・地域支援の様々な事業を行っていて、必ず市町村に設置されており全国のネットワークがあること。これからの生協×社協でできることを多々妄想しているが、今後も連携をすすめるために必要なのは、キーパーソン、同じ目的の共有、相手を理解し相手の組織のファンになる「愛」。

2. 事例報告② 小薮さん×藤井さん

コロナ禍においてコープ（生協）の緊急災害支援基金を財源に大学の学生向けに食材を無償で提供する会

を学生有志と協働で実施。もともとは食材を提供するだけのプッシュ型の支援を検討していたが社協の提案を受け、学生が主体、コープと社協が支援する体制に。学生応援プロジェクトは、つどい場や子ども食堂の活動者に協力を得てオンラインクッキング交流会を開いたり、コープで受付けたフードドライブ食材を社協が受けたり、学生が仕分けし大学寮に届ける活動、学生の声を生かして、つどい場や里山保全活動への学生の参加などに広がっている。コープからの声掛けに社協の課題意識がつながって、学生を巻き込み、協働の取組み（プロジェクト）がスタートした。そもそもは、東日本大震災の被災地支援を契機に協働がスタート。被災地の視察・支援やフォーラムなどを共催することで、お互い「経費は半分・広がりは２倍」になった。その後様々な事業を一緒に進める中で、お互いの資源や得意とするものの理解がすすみ、プロジェクトをスタートするときはまず相談する関係性になった。社協の福祉計画にはコープが協働のパートナーとして明記されている。

3.　ディスカッション、質疑応答

- 相手の強みについて整理。強みを理解することが相互理解の基本に。
- 報告での熱い想いをきいて。想いが同じならきっかけは何でもよい、お互いの事務所をたずねる、連絡をとってみる、声をかけるなどちょっとした勇気とフットワークが連携をすすめるコツになる。
- 当事者を主体にする視点、成果をわかりやすく見せる視点など、自分の組織とは違う視点があることが役に立った。それぞれの強み・視点の違いをうまく合わせることが共創を生むきっかけになると感じた。
- キーパーソンが育つには、相手からの声かけにどれだけリアクションよく反応（共感）するか、外部との関係を常にアンテナを高くして広げていくこと、自身がネットワークを持っているか、またネットワークを持っている人とどう想いを共有するかが求められる。
- 外の組織と一緒にやることは手間がかかる。仲間作りは煩わしいけど楽しい。仲間の連帯感があるから煩わしさを乗り越えていく。違いがあってもいざという時に手を握れるのは、信頼関係であり、相手への「愛」がベースになる。自分の組織だけではできないことも、相手の力を借りてやっていくことが当たり前になり、一緒にワクワクしながら取組める関係性が、地域の中でできつつあるのではないか。

参加者の声

- 連携する、つながりをつくる。組織外の組織とつながる最初は、つながりたいと熱く願う一人と、そのオファーを受けてまさに！と共感できる一人の出会いからなのだ　と思いました。
- 「ちょっと一緒に行きません？」「いくいく」という関係性ができることを夢見て頑張ってアプローチしていきたいと思います！

企画担当者のコメント

- 社協と生協の発表者が一緒に事例発表し、取り組みの基礎には日ごろの関係性があることがよく伝わる報告でした。社協×生協でどんなことができるのか、参加者のイメージが広がった企画となりました。
- 従来の JVCC に比べ、生協の参加者が増えましたが、その方々に関心をもっていただけるテーマだったのではないでしょうか。広がりつつある生協と社協の連携が、ますます広がることを期待しています。

企画担当者

鹿住 貴之（JUON（樹恩） NETWORK）
熊谷 紀良（東京ボランティア・市民活動センター）
炭谷 昇（日本生活協同組合連合会）

分科会番号 B － 1

タ イ ト ル **「ない」から「創った」地域の居場所**

サブタイトル **そのプロセスで発揮されるコーディネーションのチカラ**

ねらい

「この地域に〇〇さんが行けるような場があったら…」と気づいて周囲に目を向けてみると、「地域の居場所が広がらない」、「資金がない」、「応援してくれる人がいない」、居場所づくりにかかわる多くの方々が抱える共通の悩みや課題がある。そんな課題を飛び越えて運営される全国の魅力ある居場所は何が違うのだろうか？できる前、そしてできた後も、その活動のプロセスの中で実践されているコーディネーションのチカラをひもとき、自分自身の実践と重ねることで、実践力のアップをめざす。

登壇者

事例報告者　岩﨑 典子さん(marugo-to 代表)
事例報告者　田巻 美和子さん(新潟市西蒲区社会福祉協議会 ボランティアコーディネーター)
事例報告者　小林 千恵さん(一般社団法人えんがお スタッフ)
事例報告者　岩井 俊宗さん(NPO 法人とちぎユースサポーターズネットワーク 代表理事)
ファシリテーター　梅本 政隆さん(大牟田市企画総務部総合政策課 主査)

参加人数

35名

タイムスケジュール

15:30 開始～挨拶、趣旨説明
15:33 自己紹介
15:40 実践報告 marugo-to
16:05 実践報告 えんがお
16:35 質疑応答
16:45 ブレイクアウトセッション
16:55 全体対話・まとめ～終了

分科会の内容

オープニングで、分科会の趣旨を伝え、ファシリテーターに進行を交代した。ファシリテーター及び事例報告者４人から簡単に自己紹介を行い、前半は２つの事例報告・質疑応答、後半はグループディスカッション後、チャットを使った参加者からの質問や事例報告者相互に質問をするなど全体で対話し理解を深め合った。

1. 「ない」から「創った」2事例に学ぶ

(1) marugo-to(マルゴート)(概要)

新潟市西蒲区社協のコミュニティーソーシャルワーカー(CSW)とボランティアコーディネーター(Vco)の田巻さん、生活支援コーディネーター(SC)、月１回の認知症カフェを開催していたケアマネジャーの岩﨑さん、4者がそれぞれに同じ地域で悩みを抱えながら活動。田巻さんはシニアボランティアの養成に携わる中で男性シニアの活動先がない、定着が薄いとの悩みを抱えていたし、岩﨑さんは認知症カフェが月１回でよいのか腑に落ちないものを抱えていた。お互いの課題を同時に解決できるような取り組みはないかという話し合いから生まれた場所「marugo-to」。どうせやるなら西蒲区の特色を活かそうとした結果、男性シニアや CSW の支援するひきこもりの方、若年性認知症のやまちゃんとの出会いを通し、活動の場づくりに着手。周りを見渡し在るもの(資源)「使わなくなったビニールハウス」を活用して農作業を教え、ともに土を耕し、地元材木店から戴いた廃材で木工品を製作する、手作りピザ釜でピザを焼き、みん

なで食すなど楽しみも創出する、このビニールハウスの多機能型拠点(地域の中の居場所)が生まれた。

ボランティアグループの立ち上げ、スタッフ研修会、材木店や野菜等の直売所との連携など、社協がもつつながりやケアマネジャーという専門職で兼業農家として地域で暮らす岩﨑さんが持つつながりを最大限生かし、創り上げている。成果として①紹介できる居場所ができた②実際に参加ができる③やること(作業)の提供④男性シニアがコアメンバー⑤地域の男性の参加⑥認知症の方が活躍できる⑦市場への参加⑧生きづらさを抱える人の居場所となっていることを紹介。課題として、運営資金の調達、地元の方の参加が少ない、交通手段が少ない、コアメンバーの主体性不足等を挙げている。2019 年 NHK 厚生文化事業団「第 3 回認知症とともに生きるまち大賞」本賞受賞と大切にしている言葉を紹介して事例報告を終了した。

(2) えんがお(概要)

ビジネスアイディアコンテスト iDEA→NEXT2017 でグランプリを受賞した直後、一般社団法人として活動を開始。「1 週間に 1 回、電話でいいから誰かと話がしたい」、高齢者の現状に愕然とした小林さんは、卒業後、えんがおのスタッフとして参加。代表の濱野さんや NPO 法人とちぎユースサポーターズネットワーク代表の岩井さん等の「応援してくれる大人の存在」があったから、現在の活動ができていると話す。

栃木県大田原市の空き家を活用した取り組みを行っている「えんがお」は制度外事業として生活支援事業をスタート。また地域ニーズであった「空き家の活用」に着目し、高齢者の孤立予防・解消×若者の居場所・成長、世代間交流×空き家活用として高齢者のお茶のみスペースと学生の勉強スペースを組み合わせた居場所を運営している。そのほか、活動促進×空き家活用としてソーシャルシェアハウスや一日店長のできる店など計 5 カ所の空き家を活用した取り組みをしている。お茶を飲みに来ていた高齢者のなかから、掃除ボランティアの希望が出る。壁にはその方の紹介が貼りだされている。多世代が「ごちゃまぜ」に自然となれるよう、空間や人の動線などこまやかな工夫をしている。

地域に信頼されるまでには苦労も多数。地元出身ではなかったことから立ち上げ時に辛かったこととして「新参者感」を挙げている。Face to face で丁寧に話し、地域の人を頼り、大家さんと何度も文章で気持ちをすり合わせ、乗り越えてきた。全員参加のごちゃまぜのまち、高齢者の生活の中に選択肢を増やしていくことをめざして、応援者や一緒に走ってくれる方を募集している、と投げかけ事例報告を終了した。

2. ブレイクアウトセッションと全体での対話

ファシリテーター梅本さんが次々と書き込まれるチャットの中から質問を拾い上げ、事例報告者に対話を求めた。創る過程での人とのつながり、苦労した点、地域の自治体との関係、コロナ対策、キッチンの衛生管理方法などより具体的な質問が多く、参加者の実践への関心の高さが伺えた。

参加者の声

- いずれの事例もその仕組みも非常に充実した内容になっていると感じたが、それ以上に地域の課題となる部分にしっかりフォーカスし、それぞれの原点となる「想い」が取り組みの根底にあるものになっていて素晴らしかった。
- 地域を作っていくには、それぞれのニーズを把握することから始め、そのニーズを循環させることが、地域の持続につながっていくのだと感じた。人のニーズを把握して、それをつなげるために、一方通行にしないための関係性の構築。やりたいことを継続させるためには、箱を作って終わりではなく、リサーチしながら実現できることを落とし込んでいく。生活の一部となる仕組みが大切だと実感した。

企画担当者のコメント

- 実践者としてのかかわりの姿勢に触れ、「あったらいいな」と思う場所を創る核となるスピリットを学んだ。ファシリテーターの優れた引き出しもあり、同じニーズに触れても、場を創り出せる人になれるかどうかは、資金や設備、つながりだけでない、コアの部分を学ぶことができた。(佐藤)
- ニーズに基づき、ブレのない丁寧な積み上げと、居場所にかかわる関係者のコーディネートの匠さに感動した。(疋田)

企画担当者

佐藤正枝(公益社団法人日本社会福祉士会)　　疋田恵子(杉並区社会福祉協議会)

分科会番号 B － 2

タ イ ト ル **外国人住民と地域防災**

サブタイトル **「日本人」「外国人」の枠をこえて助け合える地域づくりに向けて**

ねらい

近年、外国人住民・外国人観光客の増加に伴い、災害時の外国人支援が社会的課題として認識されるようになった。しかし、そもそも「外国人」と言っても一人ひとりのありようは多様で、効果的な支援のためには、その多様な実体を丁寧に見ていく必要があるのではないか。そのような観点から、多くの外国人が地域社会に暮らす実態を踏まえ、「外国人」「日本人」の枠を超えてお互いが助け合える地域防災の実現に向けて参加者同士で考えたいと思う。

登壇者

話題提供者　小川 和広さん（社会福祉法人川越市社会福祉協議会）
話題提供者　中嶋 エスペルリタ アンさん（宮古市国際交流協会 地域日本語教育コーディネーター）
話題提供者　譚 俊偉さん（総社インターナショナルコミュニティ）

参加人数

30名

タイムスケジュール

15:30 開始～挨拶、趣旨説明
15:40 話題提供1 小川 和広さん
15:55 話題提供2 中嶋 エスペルリタ アンさん
16:10 話題提供3 譚 俊偉さん
16:25 意見交換「外国人住民と地域防災について」グループワーク
16:45 意見交換（全体）
16:55 全体まとめ・話題提供者コメント
17:10 終了

分科会の内容

1. 小川 和広さんからの話題提供「生活福祉資金の相談から見えた地域にいる外国人の実情」

まず、小川さんご自身の災害との関わりとして、災害ボランティアセンター立ち上げがある。その際、外国人のグループから「ボランティアをしたい」と問い合わせがあったという。次に、今回の新型コロナウイルス感染症下での生活相談である。外国人と言っても、皆、英語ができるわけではないため、複数の外国語の表示を設置し対応してきた。また、具体的な数字を挙げると、相談者の約4人に1人が外国人で、就労者だけでなく学生も含まれているとのことだった。これらを機に、地域に外国人が多くいることを、目に見える形で認識することとなった。

2. 中嶋 エスペルリタ アンさんからの話題提供「災害時の外国人～東日本大震災の時の体験から～」

東日本大震災発災当時でも20年以上、日本に居住し、日本語も使って生活していたアンさんだが、防災無線の内容は全く理解できなかったという。そのため、何が起こっているか、どうすればいいか分からず、知人宅に身を寄せ、食料を持ち寄って過ごしていた。しかし、その知人にも家庭があり、皆、決して余裕がある訳ではなく、厳しい状況だったとのこと。災害時、外国人同士で支えあって乗り切ってきたことが分かった。また、現在ではアンさん自身へ、他の外国人の知人から問い合わせが入るなど、まさに、アンさんが地域防災の担い

手の立場になっていることも分かった。

3.　譚　俊偉さんからの話題提供「外国人だけが弱者ではありません～外国人防災リーダーの取組み～」

日本にいる外国人で災害時にボランティアをしたいと思っている人は83％以上いるという調査結果があるという。しかし、実際には「外国人は支援される人」と捉えられていることが多いのではないか。そこで、譚さんは、平成25年度　財団法人自治体国際化協会（CLAIR）の多文化共生のまちづくり促進事業の助成金を受け「外国人防災リーダー養成研修」「総社市外国人防災カードの作成」の実施に関わった。市内外で活動する外国人 15 名が研修を修了し、地域の消防団と共に訓練に参加したり、教える側として関わったりして、支援者としての外国人像を提示してくださった。

4.　意見交換

まずは小グループで、その後、全体での意見交換を実施。そこでは「非常時のつながりは平常時のつながりで決まる」「コーディネーターだけで考えるのではなく、相談をくださっているみなさんと一緒にチームで考えていくこともできるかなぁ」「福祉教育で外国人の話も必要」「普段、災害関係の仕事をしているが、知らないことがたくさんあった」などの意見や感想があがった。

5.　まとめ

現在、日本には特別永住者を含め約 289 万人の外国人がいると言われ、これは日本の総人口の約 2.3%にあたる。知人が 44 人いれば、1 人は外国人ということになる。

この隣人として外国人は、日本語という言葉のハンディがある場合もあり、災害時には「優しい日本語」での情報提供などが必要になる。地震のない国もあり、災害時に日本人以上に心細い思いをすることになりやすい。文化の違いも考慮した対応が必要になる。

その一方で、外国人の平均年齢は若く、災害時においても重要な復興の担い手となる場合も少なくない。防災訓練などにも積極的に参加してもらうことで、同じ地域住民としてのつながりもでき、地域の防災力も高まる。

今回、多文化共生と防災という異分野の関係者の交流で、他者の状況を知ることができ、参加したそれぞれの立場で学びを得たとともに今後の活動展開への広がりが示唆された。今後も交流を広げたい。

参加者の声

- 外国人コミュニティ×日本人コミュニティ、社協×国際交流協会、さまざまな境目をなくすためのコーディネーションの必要性を感じました！
- 外国人を「支援される側」から「支援する側」に加わっていただくためには、やはり日常的な取り組みが必要だと再確認しました。

企画担当者のコメント

小川さんは、根拠のある数字からの気付きという話題提供、中嶋さんは、ご自身の身に起きた事柄を開示してくださり、譚さんは、想いを実現してきた経緯。それぞれ、皆さんが違うお立場ながら同じ場に集まり、話をしてくださったことで、“国籍や所属団体の枠”を越境できた。改めて多様な人や団体とつながっていることの重要性、先入観で弱者と決めつけたりしないコーディネートの大切さを感じた。

企画担当者

早瀬　昇（大阪ボランティア協会）
明城　徹也（全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD））
菊池　哲佳（多文化社会専門職機構）
仙波　愛優佳（和光市社会福祉協議会）

分科会番号 B － 3

タ イ ト ル **子どもと地域の育ちを支えるコーディネーションを探る**

サブタイトル **教育(学校)と福祉(社協)が交わる場所はどこにある？**

ねらい

誰もが願う子どもたちの健やかな育ち。その実現に向け、地域では様々な担い手が日々奮闘している。そして、奮闘すればするほど孤軍奮闘に陥り、異なる分野や専門性、組織との連携・協働を志向するものの、他者の力を借りるというのはそう容易いことではない。この分科会では、子どもと地域の育ちを下支えした学校と社会福祉協議会におけるコーディネーションのプロセスに着目する。一つの事例を詳しく掘り下げつつ、分野や専門性、組織を超えるコーディネーションの具体的な方策について検討していく。

登壇者

事例発表者　新美 勲さん(東海市教育委員会 主任指導主事)
事例発表者　前山 憲一さん(半田市社会福祉協議会 事務局次長)
事例発表者　野尻 紀恵さん(日本福祉大学 社会福祉学部教授)
コーディネーター　土崎 雄祐さん(とちぎ市民協働研究会 専務理事)

参加人数

37 名

タイムスケジュール

15:30 開始～挨拶、趣旨説明
15:35 プロローグ:あらすじの紹介
15:40 シーン①:「彼」の問題行動でつながった教育と福祉(事例報告者の語り)
15:55 シーン②:地域の大人を動かした！その後の「彼」(事例報告者の語り)
16:10 参加者同士で感想・質問のシェア(ブレイクアウトセッション)
16:20 シーン③:つながりの先に…～ある学校の取り組み～(事例報告者の語り)
16:50 質疑応答～まとめのコメント
17:10 終了

分科会の内容

進行にあたっては、教育(学校)と福祉(社会福祉協議会:社協)が連携して課題解決に取り組んだ事例について、事例発表者 3 名がそれぞれの立場から自由に語り合うスタイルとし、第三者の立場からの問いかけや内容の確認やまとめをコーディネーターが担当した。

シーン① 「彼」の問題行動でつながった教育と福祉

ある男子生徒の問題行動がきっかけで学校と社協がつながり、彼の育ちを継続して見守るプロセスを紹介。問題行動が止まらない彼と祖母との関係性や母に障害があることに着目したスクールソーシャルワーカーが学校や指導主事に対して、祖母(高齢者)や母(障害)に対するサポートをきっかけとした社協の介入を進言。子どもの在校年数や教員の人事異動との兼ね合いで「常に 1 年勝負」の学校だけでは難しかった彼の課題に、期間にとらわれない支援を提供できる社協が関わり、彼とその世帯への継続的、包括的なサポートを通して、彼に良い変化が生まれていった。

シーン② 地域の大人を動かした！その後の「彼」

シーン①の続きで、高校生になった彼の様子が語られた。彼はコンビニなどでアルバイトをしながら福祉系の学校への進学を目指していた。社協職員をはじめ、これまで彼のサポートに携わってきたメンバーたちがそのコンビニに足を運ぶことにより、彼の暮らしぶりを確認することができた。関わりを継続するなかで、地元駅前の活性化を目的とした円卓会議があり、彼にも参加を呼びかけた。彼は非常に前向きに参加し、地元首長が参加した回では「若者の意見をもっと聞いてほしい」と発言。このことにより、若者の声や視点を行政に反映させるためのプロジェクトを地元自治体が企画し、地元で暮らす高校生や大学生が「まちがより良くなる方法」について議論し、企画案をプレゼンテーションする運びとなった。「よくやっているな」と声をかけたところ、「今までいろんな人にお世話になってきたから」と答えたのが印象的だったと彼に関わり続けたメンバーは語る。

シーン③ つながりの先に…～ある学校の取り組み～

彼のサポートに携わってきたメンバーたち同士もまた、それぞれの立場が変わっても関係が継続している。シーン①で登場した指導主事は校長として小学校に異動したが、異動先では校長自ら地域との窓口になる役割を果たし、「コミュニティ・スクール」的な活動を始めるための議論の際には前述の社協にも参画を呼びかけ、そのことが学校運営協議会による LINE 相談窓口や「ママたちのおしゃべり会」（パパ・おじいちゃま・おばあちゃまも大歓迎！）の活動につながった。身近（小学校区）に相談窓口があることにより、困りごとを抱えている人の早期発見につながると考え、後者の活動日には社協の当該地域担当職員が会場（校内の空き教室）に駐在することになった。学校の立場からは「地域との関係はゆるゆると続けていくことを考える」、社協の立場からは「地域にある諸機関への働きかけは、一度断られたくらいで諦めてはいけない」というコメントがあった。

参加者の声

- コーディネーション機能は、立場としての役割分担だけではなく、人としての関わり方の役割分担があること、関係者同士のつながりづくりが根底にあることを実感。
- 「子どもの育ち」ということを中心に据えると実はシンプルな結論に行き着くということに納得。
- 学校は地域のつながりの中心。学校から始まっていくコミュニティに誰もが参画できるような仕組みづくりのヒントをもらうことができた。

企画担当者のコメント

- 「周りの人が愛情をかけたら子どもはまっすぐ育つことの体現！」と言われていたことが印象深いです。子どもの育ちにかかわる一員として心に留めたい事例でした。（三田）
- 日頃から「地域とゆるゆるとつながり続ける」こと、自分の中にある領域をしなやかに飛び越えること。これこそがこれからの社会をつくるコーディネーターに求められるものだと強く感じた分科会でした。（橋詰）

企画担当者

土崎 雄祐（とちぎ市民協働研究会）
橋詰 勝代（高島市社会福祉協議会）
三田 響子（相模原市社会福祉協議会）
野尻 紀恵（日本福祉大学）

分科会番号 B － 4

タ イ ト ル **ボランティア活動を止めるな!!**

サブタイトル **コロナ禍でどのように参加と協働をすすめるか**

ねらい

みんなで集まって、わかちあう。つくりだす。そんな集いの場を大切にしてきたボランティア活動が、新型コロナの緊急事態宣言により中止に追い込まれた。新型コロナの収束が見通せない中、いまも手探りの状態が続いている。しかし、厳しい状況下でも、「ピンチをチャンスに」新たなカタチの活動は次々と生まれている。

ウィズコロナの状況で参加と協働をすすめていくために、大切なことは何だろうか？また、どんな力が必要なのだろうか？参加者どうしで事例や体験、葛藤などを語り合いつつ、ともに考えてみよう。

登壇者

ファシリテーター　小原 宗一さん（北区社会福祉協議会）

参加人数

47 名

タイムスケジュール

15:30　開始～挨拶、趣旨説明
15:40　参加者自己紹介
15:45　チャットセッション1
16:00　チャットセッション2
16:05　グループディスカッション
16:45　全体共有
17:05　まとめ
17:10　終了

分科会の内容

オープニングで企画趣旨や分科会の進め方について説明した。どんな活動をしている人たちが参加しているかお互いに理解するため、参加者全員でチャットに自己紹介を書き込んだあと、チャットセッション・ブレイクアウトルーム・全体共有の流れで進行した。

1.　「ボランティア活動が止まっている事例」と「コーディネーターとしての動き（ブレーキ）」

ボランティア活動が止まっている事例としては、「介護施設でのボランティア」「子ども食堂・学習支援」「対話を重視する活動（サロン・朗読・合唱）」「飲食をともなう活動（食育体験）」など多数の事例が出された。その理由として、「公民館の閉鎖」「介護施設側の受け入れ中止」「県が主催しているので行政の決定に従った」「社会情勢を鑑みた大学の方針」など、受け入れ先・行政・組織の方針によるものがあげられた。

「活動をする上で気を付けてほしいことを伝えた結果、活動を止めてしまうことにつながってしまった」、「学生たちがこれまでお世話になっている地域だからこそ、『万が一』も起こしたくない」「生協なので、買い物に来られた組合員さんに迷惑がかかるといけない」など、コーディネーターとしての葛藤を感じさせる発言も出された。

2. 「工夫して動いている活動、新たに始まった活動」と「コーディネーター(組織)としての支援」

時間を短くする、人数を絞る、マスク着用など、感染対策をした上で続けられている活動、子ども食堂を食材配布へ、学習支援をオンラインへ変更など、活動形態を変えて続けている活動があげられた。

新たに始まった活動としては、「オンライン企画」が多くあげられ、「所属キャンパスを超えて参加できるサロン・ボランティア相談」「アプリを活用した非接触型のゴミ拾いサークル」「動画メッセージ」など ICT 活用が進む一方で、寄せ書きお便り(お手紙をお便りに掲載)のように、アナログでのつながり・交流の事例もあった。

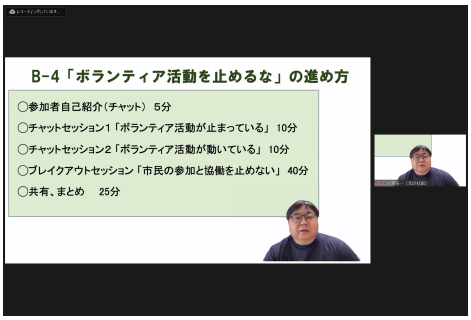
コーディネーターとしての支援では、感染対策や活動事例の情報提供、「スマホやオンライン会議のセミナー」などのオンライン化支援、活動再開に向けたワークシートと事例集の作成、Facebook 等での情報発信(活動が止まっていないことのアピール)などが挙げられた。リコグニションとフィードバックがより重視されている。

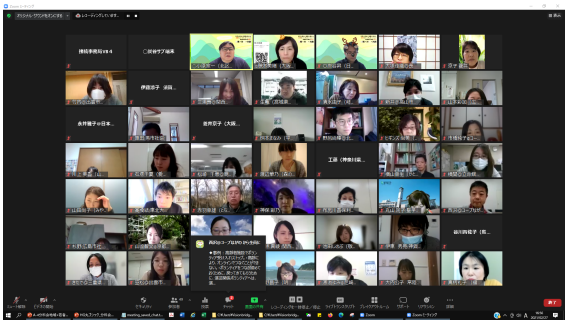
3. 「コーディネーターとして大切な視点や力」

「つながりが一番大切」「誰かのために何かしたいという気持ちを止める必要はない」などのキーフレーズが出され、参加者のあいだで共感されていた。コロナ禍でも、コーディネーターとして基本的なところは変わらないが、より必要となってくるものとして、以下があげられた。

- コロナ禍で不安な状況の中での傾聴
- 想いを継続できるようにする、モチベーションの維持
- 人と人が出会う場のコーディネート(直接会えない中で、間に立つ人がより重要に)
- あきらめない、ポジティブな発信をする

最後に、日本ボランティアコーディネーター協会の基本指針を共有して、分科会終了とした。





参加者の声

- 色々な立場の皆さんと現状を分かち合うことで、それぞれの葛藤や工夫など、具体的にお聞き出来てよかった。
- コロナにより、コーディネーターの機能役割は何ら変わらないのだけれど、実際にやることが大きく変わり、そして進化できたということが感じられるセッションだった。

企画担当者のコメント

文字での同時発言ができるオンラインの特性を生かして、チャットをフル活用した進行にチャレンジした。講師や事例報告なしで、チャット投稿で「参加者全員が事例報告者」になって交流しながら、コーディネーターとして大切な視点を話し合うことができた。ついていくのが大変だったという声もあったが、短時間で全員の情報を共有できたこと、記録を振り返りやすいことなど評価されていた。

企画担当者

小原 宗一(北区社会福祉協議会)　　椋木 美緒(大阪ボランティア協会)
炭谷 昇(日本生活協同組合連合会)

分科会番号 B－ 5

タ イ ト ル **孤立や孤独に寄り添うコーディネーションとは？**

サブタイトル **市民の参加で「ひとりにしない」つながりを考える**

ねらい

コロナ禍で深まる孤立や孤独。人とのつながりは、仕事や家を失うこと、高齢や病気で外出ができなくなることなどで、たやすく切れてしまうこともある。例えば、ホームレス支援の活動では、家の確保の問題を解決した後に家の中にひとりでいることの孤独や、最期を看取ってくれる人がいないなど、新たな問題が立ちはだかり、支援者にも多様な活動が求められる。人に寄り添い続ける「伴走型の支援」が求められる中、ここに市民はどう関わるのか、関われるのかを、お二人の実践者の活動をヒントに考えていく。

登壇者

事例発表者　江田 初穂さん（NPO 法人ホームレス支援全国ネットワーク 事務局、 認定 NPO 法人抱樸 総務部長）
事例発表者　宇都 幸子さん（阪神高齢者・障がい者支援ネットワーク 代表）
聞き手・進行　武藤 祐子さん（千代田区社会福祉協議会）
　　開澤 裕美さん（中央大学ボランティアセンター）

参加人数

37 名

タイムスケジュール

15:30 開始～挨拶、趣旨説明
15:35 事例紹介 江田初穂さん
15:45 事例紹介 宇都幸子さん
15:55 クロストーク＆質疑応答
16:25 グループワーク
16:45 全体共有
16:55 まとめ
17:10 終了

分科会の内容

事例発表者である二人に、それぞれの視点から今回のテーマに沿い発表をしていただき、その後聞き手から質問を投げ、3～4 人ずつのグループワークを行い、最後にまとめを行った。

1. 事例紹介者の活動内容と孤立や孤独に寄り添うコーディネーションの事例を学ぶ

江田さんには、抱樸が行うホームレス支援の概要、出会いから看取りまで寄り添うコーディネーション、伴走型支援についての考え方を報告いただいた。また、ホームレス支援のあり方の基準づくりや人材育成を目的とした全国ネットワークの必要性やその概要をお話していただいた。

宇都さんには、阪神大震災～東日本大震災～神戸での復興住宅での見守り支援とこれまでの活動と大事にされている考えをお話していただいた。被災された方の新しい住まいでの地域とのつながりづくり、自治会や多職種と連携する地域のコーディネーションについて報告いただいた。

2. クロストークで事例の内容を深める

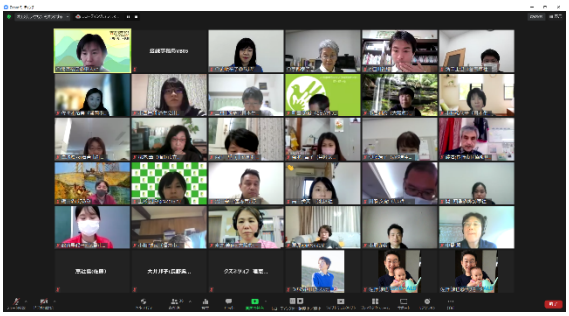
- 伴走型支援の定義はつながること、つながりを広げること。「伴走型支援士認定講座」を 2011 年度から全国で開催している。ホームレスに特化しない伴走型支援の考えを広め、約 950 名が受講。

- 抱樸の 1,600 人以上のボランティアのコーディネートでは、1 人の支援対象者に対し、数人のグループを組み、そこにボランティア以外に有給スタッフも加わることで、何かあっても対応できる体制にしている。また、元ホームレスの方もボランティアとして活躍している。
- 3 人の専門家よりも 20 人、30 人の地域の人が本人を支えることの方が大切。たくさんの糸で本人とつながる。ボランティアの存在があるからこそ頑張れる、支えてくれる人たちを裏切りたくないという思いが本人を支えている。
- 仮設住宅や復興住宅に暮らす方の、地域の中での偏見・孤立をなくすため、様々な行事やイベントに地域の方々を頼り、頻繁に声をかけ、地域の一員であることを認識してもらうように工夫した。
- 復興住宅では週 3 日お茶会を開催する中、男性の参加率が 5 割以上と高いのが特徴的。男性はこういったイベントになかなか参加せず、地域で孤立しがち。お茶会ではどのようにすれば一人ひとりが居心地良いのかを意識し、ボランティアは前に出ず、参加者同士をつなげる役割を果たす。
- 地域でつながりをつくるためには、外からの支援者だけでは限界があり、そこに住んでいる人たちや団体、キーパーソンがいかに積極的につながることができるかが大きい。そこをどのようにコーディネートするかが難しい。ボランティアは地域の方々が自ら動けるようなるための接着剤。

3. 「今後どのように孤立孤独に寄り添っていきたいか？」をテーマにグループワーク

4. まとめ

人とのつながりをつくり、「お互いさま」と言える関係性をつくっていく重要性をあらためて学び、宇都さんの団体が大切にされている言葉、「あなたのことをすべて理解できないけれども、あなたを理解しようとしている私がいる」ことの大切さを全員で共有した。



参加者の声

- 「人とのつながりで人生は変わる」という一言に尽きる内容だった。簡単にみえて難しいことだが、市民として、孤立や孤独に向き合うアクションを起こしていくときに勇気を与える一言になると感じた。
- 伴走型支援に、専門職だけではなく、地域のかかわりをコーディネートしていく重要性を再確認できた。

企画担当者のコメント

- 時間が足りない中だったが、お二人の事例が素晴らしく、優しい時間であった。グループワークでスプレッドシートを使ったが、すぐに共有できてよい反面、誤操作で消えたりするので要検討だと感じた。
- 時間の関係もあり、お二人のきめ細やかなコーディネーションについてのもう少し詳しい聞き取りやグループワークの内容の共有が十分にできなかった。チャットを活用した参加者のコミュニケーションの活性化など、オンラインの特性を活かした運営方法のあり方を再度検討したい。

企画担当者

開澤 裕美（中央大学ボランティアセンター）　　武藤 祐子（千代田区社会福祉協議会）

分科会番号 C － 1

タ イ ト ル **［さそう］リクルート大作戦**

サブタイトル **→入口はこちら→**

ねらい

参加と協働の入口をどのようにデザインするのか？人々を活動に「誘う」にあたっては、活動の入口である「リクルート」の計画と実践をいかに行うかが重要と考えられる。

最近では、SNS などを用いたリクルート手法に着目されることも多いが、この分科会では、活動の入口であるリクルートについて、新たなプログラムづくりや活動者の満足度向上などさまざまな視点から実践につながる学び合いをする。

登壇者

事例発表者　河口 秀樹さん（認定 NPO 法人自然環境復元協会 理事・事務局長）
事例発表者　伊藤 文子さん（認定 NPO 法人プラチナ美容塾 理事長）
事例発表者　布施川 香保利さん（社会福祉法人豊島区社会福祉事業団特別養護老人ホームアトリエ村 ボランティアコーディネーター）

参加人数

27 名

タイムスケジュール

10:00 開始～挨拶、趣旨説明
10:00 課題意識の共有とレクチャー「リクルートの手法・ポイント」
10:20 事例発表（3 名）（1）河口秀樹さん （2）伊藤文子さん （3）布施川香保利さん
11:20 クロストーク・質疑応答
11:50 事例発表者から一言
12:00 終了

分科会の内容

オープニングで分科会の趣旨を伝え、「誘い方」の課題意識の共有とリクルート手法のレクチャーを行い、事例発表後は参加者からの質問を受けながら、クロストークで「誘い方」の手法を深めた。

1. 課題意識の共有と「リクルートの手法・ポイント」をレクチャーで学ぶ

課題意識の共有（チャット機能を活用）では、「担い手不足」、「メンバーの高齢化・後継者不足のため解散の危機に瀕する団体が多い」、「コロナ禍における担い手不足」などの課題があがった。

レクチャーでは、ボランティアマネジメントの流れを確認。ポイントはリクルートが最初ではないこと。まず大事なことは、準備段階における①ボランティア像の明確化、②魅力的なプログラムづくり、③居心地の良さや環境整備であることを確認した。

2. 事例を通じ「リクルートの手法・ポイント」を学ぶ

① 事例発表1「ボランティア像の明確化によるリクルートの手法」（河口秀樹さん）

自然環境保全団体は高齢化が進んでいる一方で、参加したい若者は多いものの、実際の参加に結びついていない現状を受け、マーケティングの手法を取り入れた。SWOT 分析（外部環境・内部環境を強み、弱み、機会、脅威で分析）、目標の設定、ターゲット設定、ペルソナ設定という流れで、参加者像を明確にしている。

② 事例発表2「魅力的なプログラムづくりによるリクルートの手法」(伊藤文子さん)

美容ボランティアの養成研修(学ぶ)から、高齢者施設での美容ボランティアの活動(活かす)、地域イベントや講座への支援(つながる)の流れをつくることで、男性も参加しやすく、学んだことを教える機会をつくる等、ボランティアが活躍できる場面を増やしている。「やりたいことをやりたい人がやれる時にやる」を大切に、活動を「ゆるやかに」継続できることが参加につながる。

③ 事例発表3「居心地の良さや環境整備によるリクルートの手法」(布施川香保利さん)

ボランティアの対応窓口の一本化、時間をかけたオリエンテーション、一人ひとりのためにつくるボランティアプログラムや活動後のフォローなど、ボランティアの参加しやすさを大切にしている。また、地域に出向き、地域とのつながりをつくる中でボランティアを募集していることを PR する等、常に広くアンテナを張り「誘う」ことで、絶えずボランティアが集まっている。

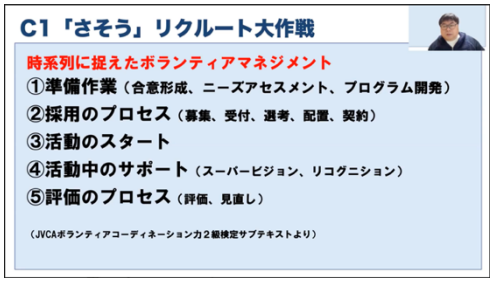
3. クロストーク・質疑応答

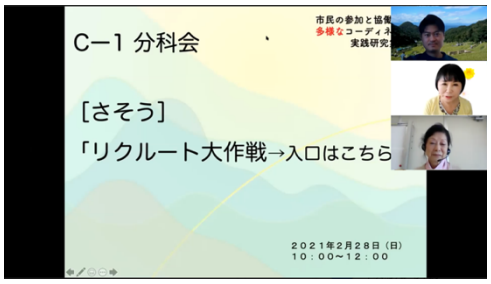
ターゲットの精度を高めることが重要。例えば、ターゲットが 25 歳の女性なら金曜の夜に案内メールを送る、活動には着用しても恥ずかしくないビブスを用意するなどの具体例が出された。

また、男性ボランティアのリクルートについての質問については、男性が集まっている団体に声をかけて紹介してもらう、地域の講座に参加している男性に声をかける等、「誘われた」ことが参加のきっかけになることが多く、積極的な声かけやアプローチが参加につながるとの回答があった。

ターゲットを絞り、集まったボランティアと活動先をマッチングした後のフォローについては、活動場所(団体)は毎回変えられるという参加しやすさを打ち出しながら、最終的には一つの団体のリピーターになり、その団体の後継者になってもらうことが目標との答えがあった。

ボランティアをリクルートする前の計画的な準備がボランティアの参加につながっている3つの異なる事例を通じ、「誘う」ことにおける準備の重要性と「誘い方」の実践の多様性をノウハウも含めて学ぶ機会となった。





参加者の声

- リクルートまでのプロセスを学べました。活動にさそう上で「共感」や「思い」だけでは限界を迎えていると感じていたので、少し踏み込んだ手法の部分をお聞きできたのは良かったです。
- 理論的な分析や仕組みの部分と、人間関係といった情緒的な部分との両方をバランスよく持つことがボランティアのリクルートにあたって車の両輪であるということがわかって意義深かった。

企画担当者のコメント

- 企画者の期待を超えるグッドプラクティスに脱帽した。チャットワーク中心のディスカッションにもチャレンジしていただいた参加者の皆さんありがとうございました。
- 誘い方の手法やノウハウについて知りたいと期待した参加者も多かったかもしれないが、その前にしっかりとした準備が必要である、という基本をあらためて学ぶことができ、よかったと思う。

企画担当者

小原 宗一(北区社会福祉協議会)　　鹿住 貴之(JUON(樹恩) NETWORK)
武藤 祐子(千代田区社会福祉協議会)

分科会番号 C － 2

タ イ ト ル **［まぜる］「たまたま」を創り出すおもしろさ**

サブタイトル **“魅惑のトッピング”にチャレンジしよう！**

ねらい

「まぜる／ごちゃまぜ」で何が起こるのだろうか。答えや正解がない時代と言われる中で、これからは分野や機関、団体を超えて共通点を見出し、相違点を尊重し合う関係が必要でないだろうか。

この分科会では、多様な分野のコーディネーター自身が、改めてまざりあう「交流・対話」の時間を持ち、「まぜる」ための手法とその姿勢に注視し、触媒としてのコーディネーションの価値やその向こう側に何をめざすのかを確認していく。

登壇者

事例提供者　菊池 哲佳さん（多文化社会専門職機構）
事例提供者　佐藤 正枝さん（公益社団法人日本社会福祉士会 地域包括ケア推進委員会委員）
事例提供者　仙波 愛優佳さん（和光市社会福祉協議会）
事例提供者　土崎 雄祐さん（とちぎ市民協働研究会 専務理事）
事例提供者　矢島 万理さん（国土緑化推進機構）
ファシリテーター　加留部 貴行さん（日本ファシリテーション協会 フェロー）

参加人数

36名

タイムスケジュール

10:00 開始～挨拶、趣旨説明～オープニング
10:10 ショートストーリー①「矢島さんのお話」（語りと他の登壇者からのトッピングトーク）
10:25 対話①「あなたの立場から何がトッピングできそうですか」 ブレイクアウトセッション
10:40 ショートストーリー②「菊池さんのお話」（語りと他の登壇者からのトッピングトーク）
10:55 対話②「あなたの立場から何がトッピングできそうですか」 ブレイクアウトセッション
11:10 小休憩
11:15 対話③「コーディネーターはどこまで“まぜる”ことを意識すればよいのでしょうか」 ブレイクアウトセッション
11:40 全体セッション～参加者からのキーワード共有～クロージング
12:00 終了

分科会の内容

1. **オープニング**
   企画担当者を代表して菊池から分科会参加へのお礼と分科会プログラムの企画趣旨の説明、進行役の加留部から 2 時間のプログラムの流れの説明を行った。
2. **ショートストーリー①「矢島さんのお話」＆対話①**
   まずは矢島が「公園×福祉」をテーマにした 5 分のショートストーリーを披露。そこに佐藤が地域包括支援センターの視点からトッピング。介護予防に地域活動、その活動の場所として「公園」もある。一方で障がいのある方の地域活動の場所として公園は拓かれているだろうか。また、「まぜる」視点は支援者側だけのものではなく市民の側も「まぜる」利点を求めて支援者側が「混ざる」ことを促進していく現状を伝えた。さらに土崎からは社会教育における参加と組織化の視点から公園利用者の活動への障がいのある方

の参加について問いかけが続き、菊池からは「公園を社会資源とみる視点が目からウロコだった」というコメント、仙波からは「社協で実施している夏休みボランティア体験プログラムで協働できる」という話も加わった。
これらの話を踏まえて「あなたの立場から何がトッピングできそうですか」の問いの下、参加者を３～４人のブレイクアウトセッションに分かれてもらい対話をしてもらった。

3. ショートストーリー② 「菊池さんのお話」＆対話②

続いて菊池が「留学生×映像作品＝まち再発見」をテーマにした 5 分のショートストーリーを披露。そこに仙波が社協職員の視点から、留学生らに地域福祉活動計画や小中学校の福祉共育に参画してもらう可能性をトッピング。さらに土崎からは留学生だけでなく高校生や障がいのある方など視点での実践の可能性に関する話題が続き、佐藤からは社会福祉法人の立場から介護現場で増えている外国人技能実習生や労働者が「地域で暮らす」サポートを視野に入れていること、新潟県長岡市寺泊漁港周辺を活動拠点としている NPO 若者会議の国際交流の実践の紹介があり、矢島からは「国際結婚した外国人女性の孤立を公園のコミュニティでサポートした」という話も加わった。
これらの話を踏まえて再び「あなたの立場から何がトッピングできそうですか」の問いの下、今回は参加者を１回目とは違う３～4 人のブレイクアウトセッションに混ぜ直して対話をしてもらった。

4. 対話③

小休憩後、「コーディネーターはどこまで“まぜる”ことを意識すればよいのでしょうか」の問いの下で元のメンバーに戻ってのブレイクアウトセッション。2 つのショートストーリー＆トッピングトーク、組合せの違う参加者同士の 2 回の対話を踏まえて、様々な想いや日頃の現場話を語りあった。

5. 全体セッション

ブレイクアウト後には参加者全員にコーディネーターとしての”まぜる”ことへの想いのキーワードを A5 用紙に書き出して全員で画面越しに見せ合い、その中から進行役が 5 人ほどピックアップし個別にそのキーワードとそこに込めた想いを紹介してもらった。さらに、事例提供者 5 人からも対話の中から引き出された各々のキーワードとその想い、企画した立場からの感想などを伝えた。

6. クロージング

全体振り返りとして進行の加留部から「計画された偶発性理論」の紹介があり、「たまたま」の出来事をただ待つだけでなく、「たまたま」を意図的・計画的に創りだすことによって何か新たなものを生み出し、ひいては自分自身のキャリアアップのチャンスにつなげてほしいとの参加者向けのメッセージを寄せた。最後に分科会アンケートへの協力へのお願いを伝えて分科会は終了した。

参加者の声

- まぜることについて、対話の中から新たな知見を得ることができました。
- スピーカー、参加者ともに異分野の方と混ざって、とても刺激的な時間でした。
- [たまたま]ブレイクアウトルームでお会いした方と、地域が近いこともありしっかりとつながることができました。次なるアクションにつなげていきたいと思います。
- 進行の仕方や構成、ブレイクアウトセッション前の説明が丁寧で、とても参加しやすかったです。

企画担当者のコメント

今回のセッションの企画・運営に参加すること自体が、私にとって「まざる」醍醐味を知るプロセスになりました。コーディネーター自身が好奇心を持って他分野の人とつながっていくことが重要だと確認することができました。企画担当者のみなさん、当日ご参加くださったみなさんにあらためて感謝です。（菊池）

企画担当者

加留部 貴行（日本ファシリテーション協会）　菊池 哲佳（多文化社会専門職機構）、
佐藤 正枝（公益社団法人日本社会福祉士会）　仙波 愛優佳（和光市社会福祉協議会）、
土崎 雄祐（とちぎ市民協働研究会）　矢島 万理（国土緑化推進機構）

分科会番号 C － 3

タ イ ト ル **［ひきだす］縁(エン)パワメント**

サブタイトル **チカラは“引き出す”ものなのか？！**

ねらい

「何かを始めたり、続けたりするにはひとりでは難しい」という考えのもと、エンパワメントについて考える分科会である。人は、行動する中で人と出会い、行動の結果だけはなく、関係性(縁)の中で何かに挑戦する勇気が出たり、やる気をそがれたりの繰り返しで、その気持ちの変化はどのような条件のときに起こるのか。この分科会では、地域活動の実践を通じて「支援する・される」ではなく、双方が関係性の中から、パワーが湧き出てしまう“縁パワメント”を実践するヒントを探る。

登壇者

ファシリテーターおよび講師　西川　正さん(NPO 法人ハンズオン！埼玉　常務理事)

参加人数

30名

タイムスケジュール

10:00　開始～挨拶、趣旨説明
10:05　講師の西川さんからアイスブレイクを兼ねた Jamboard の使い方レクチャー
　　エンパワメントについてお話
11:20　ブレイクアウトルーム～Jamboard 書きながらおしゃべり(グループワーク)
11:40　グループワークの中身を共有 Jamboard に記入
11:50　本日のひとを全員で
11:55　グループワーク(本日の感想を語りあう)
11:58　西川さんからの一言
12:00　終了

分科会の内容

趣旨説明の後、本日のファシリテーターおよび講師(以下講師)からアイスブレイクも兼ねて Jamboard の使い方について説明があり、事例を元にエンパワメントについての講義を行い、グループワークを行った。

1.　講師の実践事例を絡めながら自己紹介

「大人とのしゃべり場」「おんらいん名曲喫茶」などの事例などを紹介しながら、地域活動における負担感の分析について紹介⇒「負担感」はボランティアコーディネーションの有無に左右される。
「t ＞ a」のとき、人の気持ちに負担感(f)が生じる。
★“t” は、turai ＆ tumaranai(つらい＆つまらない)　“a” は、arigato(ありがとう)

2.　Jamboard を使って交流してみよう

① 「エンパワメント」ってなに？自分なりの言葉に置き換えてみたら？
＝つぎ花火(花火の火を周りと継いでいくイメージ・造語)、楽しさの伝染力、連絡に対する反応、内に秘めた力　など。

② 仕事や活動で、うまくいくかわらかないことを「よし、やってみよう」と思うときは、どんなとき？
＝雑談、背中をさする、肯定する、あえてその人を頼る　など。
元気は「湧いてくる」もの。身体の内側から「湧いてくる」もの。「思わず」身体が動いている。
「気づいたら」動いていた。意識下にない行為。まわりにできることは環境を整えること。

3. 「遊ぶ」(やってみよう)が生まれる条件

「あそび」が保障されているとき、遊ぶ(やってみよう)が生まれる。

「あそび」とは、 ①安心と ②工夫の余地 があること。

① 安心(気持ちの余裕)とは、責められないこと。誰かが「応え」てくれているということ。(例えば、オンラインにストレスを感じる理由の一つは、応え(反応)が分かりにくいこと)。

② 工夫の余地とは、その人にとってちょうどいい参加のすきま(自分なりの工夫の余地)を残す・整えること。安心(気持ちの余裕・あそび) ： 責められない、一緒に責任をもってくれる仲間

③ 工夫の余地(ゆるみ) ： ≒参加のすきまを考えるということ。そうすれば「遊ぶ」(やってみよう)が生まれる。必要なのは「応え」。オンラインが増え、不安なのは反応が分からないこと。反応の練習が必要。そのやり取りの中から、パワーが湧き出る。

4. グループワークで本日の感想などを語りあう

5. 全体でどんな意見が出たのかを共有し、本日感じたキーワードを共有

失敗しても大丈夫、笑い＆緊張と緩和、こうあるべきという価値観を取っ払う など

6. まとめ

“t”（つらい＆つまらない)の発生源をおさえ、その対策をきちんとすれば、元気になっていくもの。

ワークの中で出てきたキーワードを楽しみながら実践して、安心の場ができれば「縁(エン)パワメント」につながっていく。

参加者の声

- 西川さんのスライドの作り方や言葉の選び方がいつも分かりやすくて、伝えようとされていることがスッと心に入ってくると感じた。まんまと自分が「縁(エン)パワメント」されてしまった。
- 安心できる空間であること、工夫の余地があること、それが相手の力を引き出す大事なポイントである、という事が分かった。失敗してもいい、失敗だって大事なプロセスなんだ。この言葉をしっかりと心に刻み、今後の支援につなげていきたいと思った。

企画担当者のコメント

この分科会に参加した人がどんどん元気になっていくのが感じられた。この元気が湧き出た感覚が、それぞれの現場につながって、そこで出会う人達に伝わっていくのでは？と予感される。まさに「縁(エン)パワメント」。そして、ふだん、もやっと感じたり、考えたりしていることを講師によって言語化され、整理されていくことの気持ち良さも感じられた分科会になったのではないかと思う。

企画担当者

開澤 裕美(中央大学ボランティアセンター)　　炭谷 昇(日本生活協同組合連合会)
竹田 純子(龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター)　　橋詰 勝代(高島市社会福祉協議会)
疋田 恵子(杉並区社会福祉協議会)

分科会番号 C － 4

タ イ ト ル **［つくる］プログラム開発力の向上**

サブタイトル **活かせる秘訣と魔法のシート**

ねらい

前年踏襲の事業ばかりをしていると時代に合わなくなるばかりではなくチームは弱体化し疲弊してしまう。そもそも社会構造は絶え間なく変化しており、ボランティアコーディネーターを取り巻く環境は変化し続けている。そんななか住民の暮らしや市民活動を守り育てるためには必要な新しい何かを作り出す姿勢が常に必要である。いつも新しい発想で時代を駆け抜ける講師の事例と手法を企画に視点から学び、自分でも企画を作るきっかけをつかむ場をこの分科会で作っていく。

登壇者

講師　　小柴 徳明さん（黒部市社会福祉協議会 課長補佐経営戦略係長）
聞き手と進行　長谷部 治さん（神戸市兵庫区社会福祉協議会）

参加人数

40名

タイムスケジュール

10:00 開始～挨拶、趣旨説明～登壇者自己紹介
10:05 小柴さんより最近の新たな取り組みの事例紹介
10:25 小柴さん・長谷部さんフリートーク
10:45 ブレイクアウトセッション①感想をシェア
10:50 長谷部さんより魔法のシートについて解説
11:20 個人ワーク（2人のブレイクアウト）魔法のシートを使って企画をしてみよう
11:45 「魔法のシート」を使った企画発表
11:50 まとめ
12:00 終了

分科会の内容

1. 小柴さん自己紹介と実践報告

「経営戦略係長」。他にも様々な役割を持つ。NPO 法人や ITC 活用を考える任意団体など。「社協って何？」という動画もそのつながりで作成した。経営戦略係は「10歩先をみて考える」ことが仕事。ICT や新しい技術を導入していく。最近では身近な相談ツールとして LINEbot の導入や、福祉版移動シェアサービスの企画など。企画の実現をするために様々な手段を取り入れながら動いている。

2. 小柴さん・長谷部さんトーク

雑談の中で生まれた企画チームのスピード感がすごい。チームといっても社協内には数人。相談できる外の人も含めてのチーム。

今は「調査研究は時間がかかるのでするな」というスタンスある。困りごとのある人を助けるために必要なら、仮説をもとに、よその良いものを TTP（徹底的にパクる）して小さく始める。理解されにくいことを見えるようにして伝える。修正は後から。社会情勢の変化が加速しているので、ちょっと待っていたら誰も助けられない。

難題を突破するために、誰かと組んでやっていく。全部自分でやるのは無理。一緒に実践しながら、特区や法律を変えていくなどの交渉をしていく。

社協本来の役割は仕組みを作っていくこと。パッチ的な仕事との両輪でやっていく。お金を出すところはシビアなのでパッションにはなびかない。数字を出して、ロジカルに説明できる力も必要。

3. ブレイクアウトセッション① 感想のシェア

4. 長谷部さん 魔法のシート解説

「日のもとに新しいものなし」。参考になるものはどこかに必ずある／現状の30%は変化させたい。変化はストレス。対応できる程度にとどめる。／科学的な視点と同じくらい、自身が「なぜそのことを必要と思ったか？」も大事／企画の目的と目標をはっきりと分ける／3つの手法を活用し企画を整理する（①拡大・縮小②複合化・分離③新技術の導入）／概要文を書く→14文字以内のキャッチコピーを考える／ハッシュタグ（＃）をたくさん作る／お金のことを考える。以上のことが詰まったシートを作成してみる

5. ブレイクアウトセッション② 2人1組で魔法のシートを記入してみよう

記入ができてシェアしてよい人は、メールか FAX にて送信してもらう。

3件のシートを参加者とシェア「パッとわかるトラブル解決方法」「移動カフェで当事者発信応援」「自然と自分を見つめる村体験」

6. まとめ

長谷部さん ： 魔法のシートのような「コピー」が必要。この場は新しいことを身に着ける、トライする機会でもあったと思う。変化についていくのは大変だけど、恐れずにやっていきたい。今日の時間が少しでも明日からのプラスになっていたらうれしい。

小柴さん ： アイディアをオープンにすることが大事。今回の魔法のシートも。コンテンツをシェアしてみんなで使ってよい社会にしていくことが使命。アイディアペースでみんながよくなればよい。思っていることをいろいろな形で自ら発信していくと、新たなつながりが生まれる可能性がある。

参加者の声

- 社協改革のトップランナーである小柴さんと長谷部さんの豪華布陣に大満足。「魔法のシート」というお土産ももらえて、とても役に立つ実践的なセミナーでした。
- できない理由を探すのではなく、行動あるのみだということを改めて実感しました。ただ、それにもコツややり方があるんだよということを学べたと思います。

企画担当者のコメント

- 新しい動きをつくっていくにはちょっとしたところ・段階からはじめていくこと、見せていくこと、よいところを真似したりシェアしたりしていくオープンな協働関係が大切であることを感じました。
- 魔法のシートを、ぼんやりと考えている自身の企画を明確化するツールとして活用したいと思います。

企画担当者

長谷部 治（神戸市兵庫区社会福祉協議会）
熊谷 紀良（東京ボランティア・市民活動センター）
筒井 のり子（龍谷大学）
三田 響子（相模原市社会福祉協議会）

分科会番号 C － 5

タ イ ト ル **［きめる］決める？決めない？ みんなで考える「合意形成」**

ねらい

市民活動では、対話を重ねて、みんなで決める合意形成のプロセスが重要だ。ボランティアとの話し合い、スタッフとの話し合い、協力団体との話し合いなど、多様な人たちと対話をかさね、合意形成を図っていく。しかし、対話による合意形成は、それほど単純でも容易でもない。

そもそも対話がない合意形成もよくおこっている。対話を必要と感じていない人たちもいる。さらに、新型コロナウイルスの感染予防のため、集まって議論することができずに、対話が行いにくい状況がある。

この分科会では、参加者の問題意識をもちよって、対話による合意形成についてみんなで考える。

登壇者

ファシリテーター　青木 将幸さん（青木将幸ファシリテーション事務所）

参加人数

43名

タイムスケジュール

10:00 オリエンテーション・趣旨説明
10:15 オンラインでのアイスブレーク
10:30 Zoom 機能を使って、合意形成のプロセスを体験
11:00 休憩
11:10 グループディスカッション
11:45 全体討議
12:00 終了

分科会の内容

分科会のテーマを『決める？決めない？ みんなで考える「合意形成」』として、ファシリテーターに青木将幸さんをむかえ、合意形成のプロセスを体験した。

オープニングでは、企画者から問題意識の共有を行った。市民活動では、ボランティアやスタッフ、当事者、協力者との対話を重ね、合意形成を図っていくことが大切であるが、十分に意見交換が行われていないケースがあることが提起された。加えて、コロナウイルスの感染予防のため、集まって議論することができずに、オンラインでの話し合いが増え、プロセスをつくりにくい状況がうまれていることも課題として挙げられた。

1. オンライン会議のコツ

ファシリテーターの青木さんから、画面越しのオンライン会議は、話し手と聞き手の様子が分かりにくいので、様々な工夫が必要だということが最初に話された。そのひとつに、聞き手が反応を豊かにすることが大事だという。「私もそう思うよ」というときに、普段よりも大きくうなずくことで、話し手と聞き手の距離感は違ってくる。オンライン会議ツールのなかには、「いいね」「〇」「×」などの反応ができるボタンもあるので、利用するとよいというアドバイスがあった。

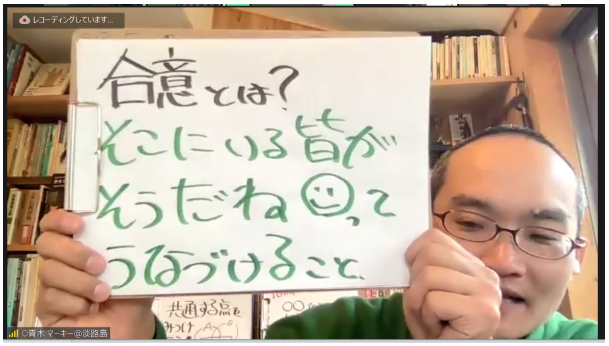
2. 合意形成を体験してみた

オンライン会議ツール“Zoom”には、「投票」という機能があることが、ファシリテーターから紹介された。オンライン会議の設定時に、「質問」と「回答」を入力し、会議中に投票機能をオンにして、参加者が選択肢を選ぶことができる。参加者がどのような意見を持っているかを、可視化することができる。ボタンひとつで参加できるので、アイスブレークとしても利用ができる。

実際に、合意形成のプロセスを体験するために、「オリンピックの開催方法について」というテーマで意見交換を行った。まず「投票」機能を使い、参加者全員の意見を可視化した。その後、小グループに分かれて、「なぜそのように考えるのか？」ということについて出し合った。意見を出し合うときも、参加者の意見を記録して、可視化した。そうすることで、参加者の共通理解も進んだ。
参加者から出された意見は、もちろんバラバラであった。開催をしないという意見から、無観客での実施など。ファシリテーターからは、合意形成を進めるうえで、異なる意見の人の話を聞くことの重要性が提起され、異なる意見のなかでも、共通点を探してみるワークを行った。
異なる意見でも、重なるゾーンがあるはずで、「〇〇なら合意できますか？」という投げかけをしてみようと呼びかけがあった。

3. まとめ

ファシリテーターからは自分と異なる意見の発言を丁寧にきき、その場にいるひとたちみんなが「そうだね」と思えることをみつけていくことが重要だと話された。そのためにも、可能な限り意見を可視化することや、会議の進行役や主催は「よい問いかけ」を準備することが大事だと。



参加者の声

- 合意形成を学んでその場で実践できたのでとても分かりやすかったです。やはり、その場にいる人全員が受け身ではなく主体性をもって臨める会議を目指していきたいと感じました。反対意見の中にも重なる部分を探す訓練をしていきたいです。
- 共有シートや投票機能など、知らないことがたくさんありました。オンライン上の合意形成難しいなって思っていましたが、いろいろ工夫できることも学べました。

企画担当者のコメント

対話による合意形成は難しく、さらに、オンライン会議で行うことはよりハードルが高く、なんとかヒントを見つけたいと考え、分科会を企画した。青木さんのファシリテーションで、実際に合意形成のプロセスを体験することで、合意形成に必要な「共通点さがし」ということの重要性を体感することができた。「感情を持ち込まないというが、感情ベースでの理解がないと進まない」という言葉が印象的だった。

企画担当者

上田 英司（認定 NPO 法人日本 NPO センター）　杉浦 健（共働プラットホーム）
西川 正（NPO 法人ハンズオン！埼玉）　椋木 美緒（社会福祉法人大阪ボランティア協会）

クロージングセッション

タ イ ト ル **新たな時代を拓くコーディネートの価値**

サブタイトル **明日からのコーディネーションのためのふりかえりとわかちあい**

ねらい

3日間の参加(視聴)お疲れさま！ 最後の分科会で語られたこと、語り切れなかったことを整理し、明日からのコーディネーションの糧となる時間にする。越境し、対話をした時間を経て、共創を具体化するために「Do」(次のアクション)を考える。

登壇者

ファシリテーター

鹿住 貴之さん
日本ボランティアコーディネーター協会 副代表理事
JUON(樹恩) NETWORK

青山 織衣さん
日本ボランティアコーディネーター協会 副代表理事
岸和田シティプロモーション推進協議会

タイムスケジュール

13:30 開会～3日間の労いと進め方の説明
13:35 C分科会からの概要と協議内容の報告(4 分×5 分科会)
13:55 ブレイクアウトルームの進め方の説明
14:00 ブレイクアウトルーム(小グループでの対話)
14:15 全体でのディスカッション～チャットの書き込みも
14:25 ファシリテーターからの感想
14:30 終了

分科会の内容

■ **ファシリテーターからの開会宣言とクロージングの進め方を説明**

2 月 23 日のオープニングセッションに始まり、分科会での対話を重ねてきた。さまざまなことを学び、交流して、元気になった。でも現場に戻るとまた厳しい現実が待っている。なのでクロージングでは学びの成果を実行に移すということを大切にしようと担当者の中で話し合った。学んだことを活かすためには、①「何を学んだか」振り返る、②「学んだことを何に生かせるか」考える、③「いつやるか」を決める、④「いつ思い出し、振り返るのか」を決める、ということが大切。クロージングセッションでは 3 日間の学びをみんなで振り返りながら、その活かし方を一緒に考えていきたい。

■ **分科会の概要を共有しよう**

本来はABCすべての分科会を振り返りたいところだが、時間の制約もあるので、ここではC分科会「さそう」「まぜる」「ひきだす」「つくる」「きめる」の5つの内容を共有する。

（分科会の内容は報告書の該当部分を参照）

■ **越境し、対話し、共創するために**

実際に行動に移すとぶつかる現実の壁を越えるために、「私は明日からこう行動したい」ということを少人数〈4 人程度〉で話し合い、自分自身の行動指針を持ち帰ろう、ということで 15 分のブレイクアウトルームでの話し合いを行った。

■ **明日からの共創に向けての行動をチャットに書き込もう！**

ブレイクアウトルームで話したことから、あらためて明日からやろうと思うことをチャットに書き込んだ。

（以下、書き込みから）

・自分から一歩踏み出す！　・TTP（徹底的にパクる）　・ズームを嫌がらない　・いろいろ巻き込む
・環境を整えみんなにやってもらう！　・自分自身の壁をとっぱらって、積極的に行動する
・他団体と積極的に話す　・応える！応えまくる！！　・共助～めんどくさいことを楽しんでやる！
・誰かがやってくれるのではない、自分がパイオニアになるくらいの意気込みでいくぜ　・自分が楽しむ！
・国際交流協会の存在を生協の人たちに知らせする　・フットワーク、ネットワーク　・怖がらない
・反対意見こそ、ちゃんと話を聴く！　・共通点さがしをすること　・より丁寧な対話を心がけます
・ゆとりをもって、タイミングを逸せず「応える！」　・小さくはじめる！　学生と地域の接点を探す
・新しい協同組合の連携の活動を、みんなでしっかりと話し合い、合意を作り実践につなげる。ふぁいと！
・いろいろな現場に行ってみる。机に座っていない　・まずは、事業計画を立ててみる　・自分から話す
・反対意見こそ大切にして，意見の重なる部分を探す　・できない理由を先に考えない
・魔法シートを完成して、実行に移す　・決める会議を運営する　・まずは気持ちをアップ！
・相手を知るなどコーディネーションの基本をおさらいする　・感度をあげて、ちょっとした接点に気づく
・双方向のコミュニケーション（マクロもミクロも）、そして仕組みもつくる　・自分に余裕を作る
・思いを共有できるように言語化して仲間に見せます　・自分のアイデアをオープンにして、越境する
・やりたいことがたくさん。まずはスケジューリングして楽しむ！　・えがお　・できることからやる！
・勇気をもって、外部の方たちとつながりに行く。扉を叩こう　・事前リサーチと顔が見える関係性作り
・これまで視野に入ってなかったいろいろな団体の門を叩く。地域課題の共有があるはず。それを元に！
・生協に電話する　・一人ひとり、ひとつひとつの持ち味を大切にする　・つながりを大切にしたい
・明るく楽しくコーディネート　・勇気と好奇心で、奇跡を起こすチャレンジを！
・コロナ禍でできないことが多かった１年でしたが、「考えられる」1 年でした。そこで出たアイデアを始めます
・システム社会じゃできない面白いことができるように大義名分を活用する！まぜこぜ（インクルーシブな社会）に
・魔法のシートをもう一度咀嚼して、目的・目標を分けて考え、14 文字のキャッチコピーを意識する！っていうことをみんなに共有する！　・何気ない会話からアイデアを見つける　・どんどん共有！

・異業種の知り合いを増やす。外に積極的に仲間を増やす　・応えてくれる人になる！
・自分の分野の課題を抱え込まない。開く！　・異なる意見こそ丁寧にきく！　・ネットワーカー！
・協働相手のことをもっと知る。社協・生協でもっとつながる（大阪ボラ協も!）　・ペルソナをつきつめる
・with コロナを見据えた、学生向け「ハイブリッドボランティア」を、魔法のシートを参考に作っていきたいです
・「感情からの理解」は大切　ということを、自分からやってみます　・かっこいい人と若者の懸け橋になる
・地域との関わりをつなぐために、一歩踏み出します！分科会でたまたま出会えた方とお会いします！
・違う意見の共通点を見つける　・「背中をさする」ことは直接はできなくとも「寄り添う」ことを大切に！
・オンラインでもリアルでも、対立する意見の共通項を見つけて気持ち良く合意形成を行う
・「さそう」以前に、自分たちのことをよく整理する　・まずは事業・仕事の整理をする時間を作り、とる！
・オンラインに慣れていない人に慣れてもらうように分かりやすく解説する　・大学のボラセンに行く
・社協の知り合いに久々に連絡取る　・オンラインのアイスブレイクを勉強する
・小さな体験を重ねて遊びと失敗を重ねる　・足でかせぐ！！アイデアをオープンにする！まずはチーム内
・合意形成のポイントを学生と一緒にやる！　・同僚とJVCA集会の振返りをやる　・明るく楽しくTTP
・学生の状況をもっと発信します！コーディネーターもポジティブに、楽しく、わくわくを忘れない！
・地域版「まぜる人がまざる」機会をつくる　・いろいろなところに出向く。あしで稼ぐ
・自分の企画や途中でも誰かに聞いてもらう！それから色んな方にアドバイスをいただく！
・「フクシ×○○」の掛け算を自由に楽しむ！視野広く！大学 VC と連携したいです！　・最後は人間の魅力
・ボランティアという言葉を使わないイベントをやり、まぜる！　・楽しむ。いいね、とたくさん言う
・生活に「あそび」をつくる。もう少し丁寧に暮らしたいと思います　・何だかんだ言っても、楽しく！！！
・安心できる、相談できる場づくり。会議に感情を持ち込んでもいいということ　・外に出て、足で稼ぐ！
・事務所の中にばかりいない。自分から足を運び、つながる　・居心地の良さとつながりを意識する！
・missing link をつなげる／どんどん出ていく、新しい分野と繋がる　・踏み出す勇気を持つ
・情報を積極的に得て、支援方法の枠を広げる！　・自分が好き！楽しい！と思える事から始めてみる
・一緒にワクワクすることを忘れない！　・「あそびの生まれる場所」を読む　・YouTube がんばる
・オンラインに慣れていない人にもオンラインの方法と楽しさを伝える　・魔法のシート完成させる
・留学生が参加しやすい活動、オンライン・コミュニケーションに馴れる企画を実施する
・コーディネートを楽しめるようになりたい！　・学んだこと、感じたことを伝える！！
・コロナに怯えずフットワーク軽く！　・私たち自身が楽しみながら新しい企画を造り続ける
・アイデアをどんどん出す！自分の考えを投げかけて仲間を増やしていく！！　・夜明け前は一番暗い！
・Idea を実際に具体化を考える　・エンパワメントを意識した関わり方を意識し行動する
・窓口に来たボランティア希望の方をオンラインでもできるボランティアにつなげる（プラチナ美容塾へ！）
・災害と多文化共生の取り組みをもっと学ぶ、深める　・好奇心をもって、情報を集めに行く
・自分と違う意見の発言こそ、より丁寧に聞き、合意点を探る　・アンテナをもっと張り巡らせる！
・今回の学びを職場で共有！そして、現場にいく！　・自分自身がいろんなことに面白がる
・話を聞いてくれる人を大事にする　・今日を頑張ることで明日が来る　・JVCA の会員になる！
・関わる人一人ひとりと丁寧に接したい　・学びの場の必要性を感じています
・世代・分野・専門性で分けるのは入り口で、その先は人と人とのつきあい

■ まとめ

越境はゴールではない。どんな時に越境したいと思うのかと考えると、これはほっとけない！ 何とかしたい！ もっと楽しく、もっと面白くしたい、いろんな人に関わってほしい…という時。越境しようと簡単に言うけれど越境するには環境が必要だ。戻れる場所や、羽を休める場所があること。同じ価値観で語れる仲間がいる、行動に意味づけしてくれる人がいること等々。安心して居られる環境をつくることが大切だと今回の集会に参加してあらためて感じた。ほんまもんの「対話」を生み出すためには、そのまんまでいられたり、わきまえずに意見が言えたり、納得がいくまで話し合えたり、ということが必要だと思う。

安心して居られる場所は大切。最初のオープニングセッションでも「食べる」ということが話題になった。合宿などで同じ釜の飯を食ってつながりが生まれ、そういうところからともに居られる「共在」という言葉も出された。自立とは依存先を増やすことというキーワードも話された。そういう場をつくることがコーディネーターに求められている。

コロナ禍でコーディネーターが孤立している状況もある。明日のアクションにつなげるためには、私たちが孤立せず、学び続けなければならない、オンラインの活用も進んでいるので、ぜひ日本ボランティアコーディネーター協会を活用してほしい。学びを継続していこう！

参加者の声

- 他の所属団体さんとお話できてよかった。前向きな気持ちになり、明日から頑張ろうと思った。具体的には、今知っている資源を大切に、そこから異なる分野と交流を増やしていきたいと思います。
- スムーズな進行で分かりやすかったです。
- 他の分科会の報告も聞くことができ、ブレイクアウトで感想なども共有できたので短い時間でしたがとても良かったです。
- 素晴らしい集会でした。たくさんの刺激をいただきました。明日から行動に移したいと思います！

企画担当者のコメント

限られた時間の中で、分科会報告を聞くことと、期間中の気づきを話し合うことのバランスをどうとるか悩んだ。ファシリテーターとの話し合いの末、コーディネーション実践者に共通する問題意識であるC分科会を共有し、全体を通じて感想とこれからやりたいことを小グループで話し合い、まとめていくという流れで実施。小さくても“行動に移す”ことが大切。「元気」とともに、具体的な行動の指針を持ち帰ってもらえたことは良かったと思う。

企画担当者

唐木 理恵子（紬ワークス）
後藤 麻理子（日本ボランティアコーディネーター協会）
西川 正（ハンズオン！埼玉）
早瀬 昇（大阪ボランティア協会）
鹿住 貴之（日本ボランティアコーディネーター協会 副代表理事、 JUON（樹恩） NETWORK）
青山 織衣（日本ボランティアコーディネーター協会 副代表理事、 岸和田シティプロモーション推進協議会）

オプション企画

タイトル **本番前から盛り上がれ！　～「前夜交流会」（前夜祭 2/26 開催）**

まだまだ終わりたくない！ ～「放課後おとな教室」（交流会 2/27 開催）

ねらい

「明日からいよいよ分科会が始まります！」「分科会一日目の参加（視聴）、おつかれさまでした！」
分科会で語られたこと、語りきれなかったことを整理し、明日からのコーディネーションの糧となる時間にする。越境し、対話をした時間を経て、共創を具体化するために「Do」（次のアクション）を考える。

参加人数

延べ 161 名（前夜祭 64 名、交流会 97 名）

タイムスケジュール

◆前夜祭（2/26 開催）
開　始　19:00～（趣旨説明）
第一部　19:20～（交流）
休　憩　20:00～
第二部　20:10～（交流）
閉　会　21:00

◆交流会（2/27 開催）
開　始　17:40～（趣旨説明）
第一部　18:00～（交流）
休　憩　18:40～
第二部　18:50～（交流）
閉　会　19:40

交流会の内容

前夜祭、交流会いずれもブレイクアウトルーム（Zoom）の機能を活用し、参加者の様々な関心事を包含するように交流テーマを用意した。従来の JVCC（全国ボランティアコーディネーター研究集会）における「つながり広場」「おみやげ選手権」等の役割をオンラインで具現化した（各団体の部屋、ご当地を紹介しまくる部屋など）。また各ルームでは基本的に企画担当者を配置し、オンラインに慣れていない人でも交流がスムーズにできるように配慮した。
※交流テーマと参加者数については以下の表を参考

本番前から盛り上がれ！～「前夜交流会』（前夜祭 2/26 開催）
※翌日から始まる研究集会分科会に向け、参加者同士の関係性を温める役割で実施。

第一部	人数	第二部	人数
メインルーム	9	メインルーム	0
研究集会ビギナーのための部屋	5	研究集会ビギナーのための部屋	4
おさむの部屋 ※ボランティアコーディネーション力検定合格者向け	4	おさむの部屋 ※ボランティアコーディネーション力検定合格者向け	8
社協の部屋	3	社協の部屋	0
On-Line 活用したい！な人たちの部屋	4	On-Line 活用したい！な人たちの部屋	5
日本ボランティアコーディネーター協会（JVCA）20 周年を語る部屋	6	日本ボランティアコーディネーター協会（JVCA）20 周年を語る部屋	3
ご当地を紹介しまくる部屋	4	ご当地を紹介しまくる部屋	3
		山好きの部屋	2
		災害ボラの部屋	4

まだまだ終わりたくない！ ～放課後おとな教室～（交流会 2/27 開催）

※同じ分科会に参加した参加者同士の交流などを促進する役割で実施

第一部	人数	第二部	人数
メインルーム	5	メインルーム	4
研究集会ビギナーのための部屋	7	研究集会ビギナーのための部屋	3
大学ボラセンの部屋	3	大学ボラセンの部屋	5
日本ボランティアコーディネーター協会（JVCA）の部屋	4	日本ボランティアコーディネーター協会（JVCA）の部屋	3
東京ボランティア・市民活動センター（TVAC）の部屋	4	東京ボランティア・市民活動センター（TVAC）の部屋	8
大阪ボランティア協会の部屋	9	大阪ボランティア協会の部屋	7
ご当地を紹介しまくる部屋	3	ご当地を紹介しまくる部屋	6
阿波おどりの部屋	3		
A-1 分科会	2	B-1 分科会	5
A-2 分科会	3	B-2 分科会	0
A-3 分科会	3	B-3 分科会	4
A-4 分科会	5	B-4 分科会	4
A-5 分科会	0	B-5 分科会	2

参加者の声

- 交流会は分科会終了からのインターバルが短すぎて参加できなかった。前夜祭くらいあった方が良かった。
- お久しぶりな方、はじめましてな方にフライングでお会いできて、いかにも前夜祭、というワクワク感が高まる場でした。帰宅がどうしても間に合わず、後半にしか参加できなかったのが残念でした。
- ブレイクアウト（グループ）に分かれるまでどんな人が参加しているのかわからず緊張し、難しさを感じました。一方で交流会では参加できなかった分科会の話が聞けてお楽しみが2倍に増えてよかったです。
- 職場で阿波踊りを舞う日が来るとは思っていませんでした。踊るだけではなく、「知っているし興味はあるけど、実際に参加するきっかけが少ない」「友人知人が始めるきっかけになる」「いざ始めると中の人のおもしろさや魅力にどんどん引き込まれる」など、阿波踊りとボランティアの共通点の話なども出てきて、ホストのアツい想いがほとばしる、とても楽しい時間でした！次はもっと大人数で踊りたい！

企画担当者のコメント

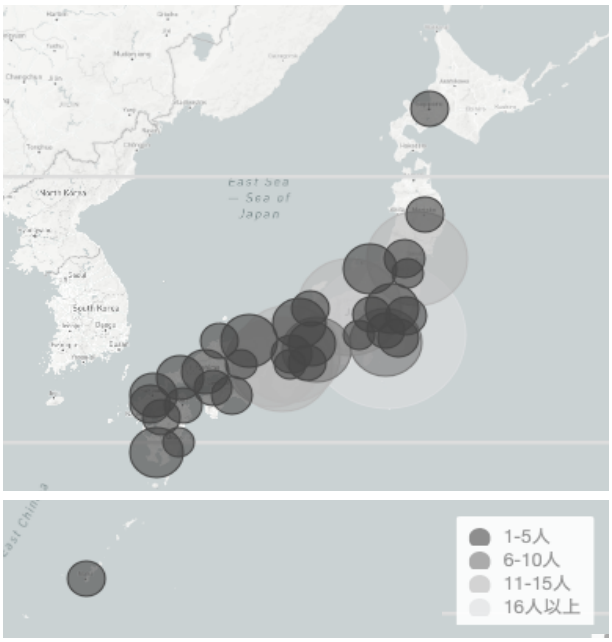
- オンライン上では対面で実施するよりも交流が深まりにくい特性があるため、参加しやすいテーマを多数設け、二部制、事前交流も含め2夜にわたり実施するなど、試行錯誤をした。一方で、研究集会の参加者は学びを目的としているためか、参加が少なかったように感じた。また、「分科会の部屋」はA・B 各分科会が終わってすぐに、「残りたい人はしばらく開けているから残っていてくださいね！」といったような呼びかけ方をして 30 分くらい「放課後タイム」を設けた方が良いと思った。
- 交流会の部屋名の方は、「（分科会番号）の部屋」ではなく、「福祉の部屋」「多文化の部屋」「災害の部屋」と具体的なテーマで示す方が分かりやすいのではないかと思った。

企画担当者

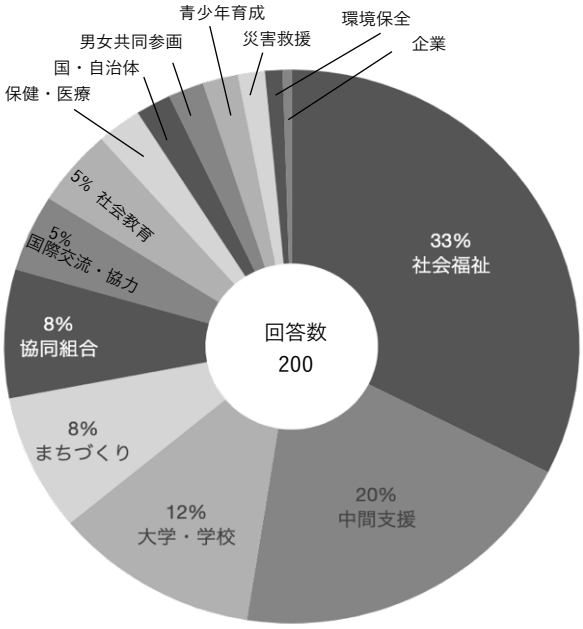
國實 紗登美（龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター）
杉浦 健（共働プラットホーム）
高橋 義博（府中市市民活動センター プラッツ）
宮城 智広（鶴ヶ島市社会福祉協議会）
佐藤 匠（至学館大学）
高橋 あゆみ（同志社大学ボランティア支援室）
橋口 文博（じゅうしん神戸）

データでふりかえる研究集会 2021　～申込者 200 名の属性～

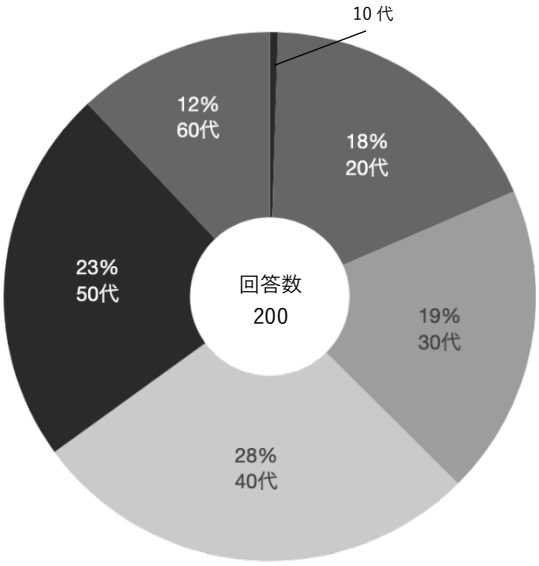
都道府県



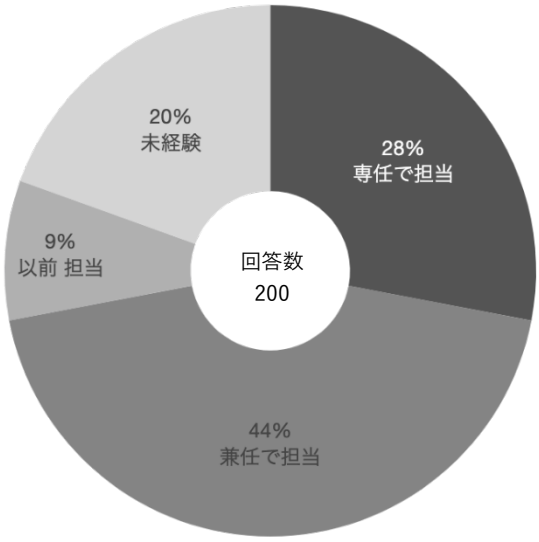
活動分野



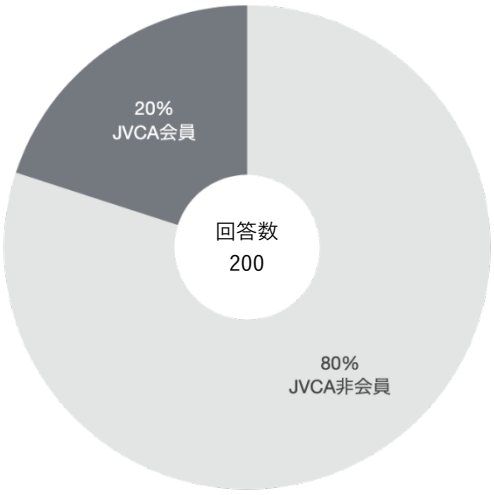
年齢層



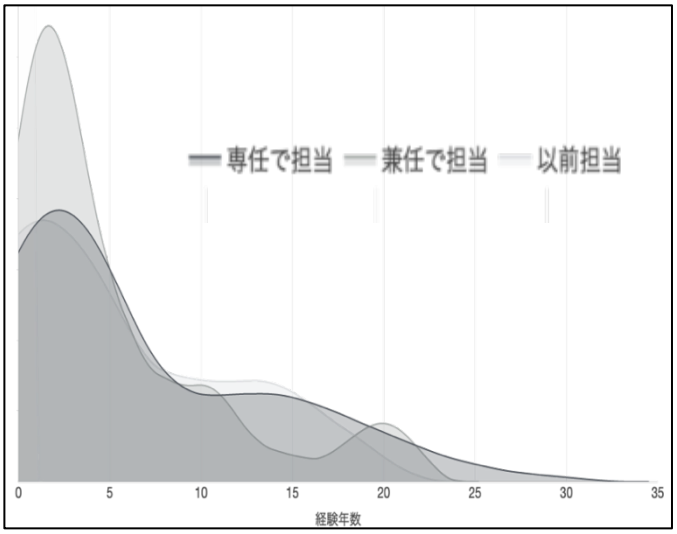
コーディネーションの専任／兼任



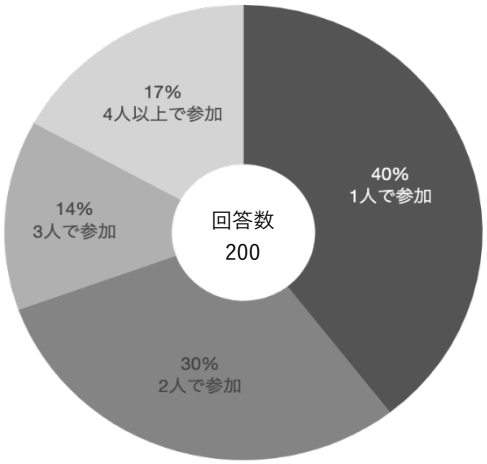
JVCA 会員の比率
（正会員・準会員のみ）



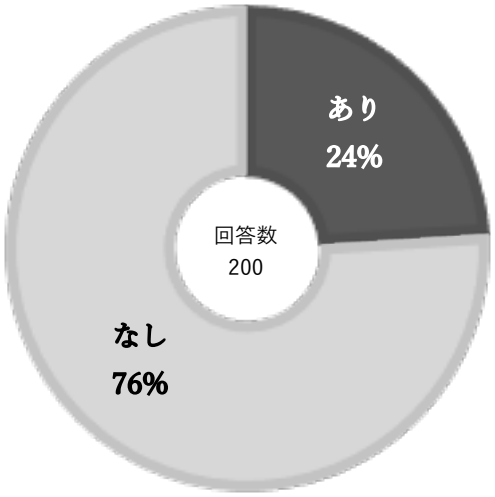
コーディネーションの経験年数



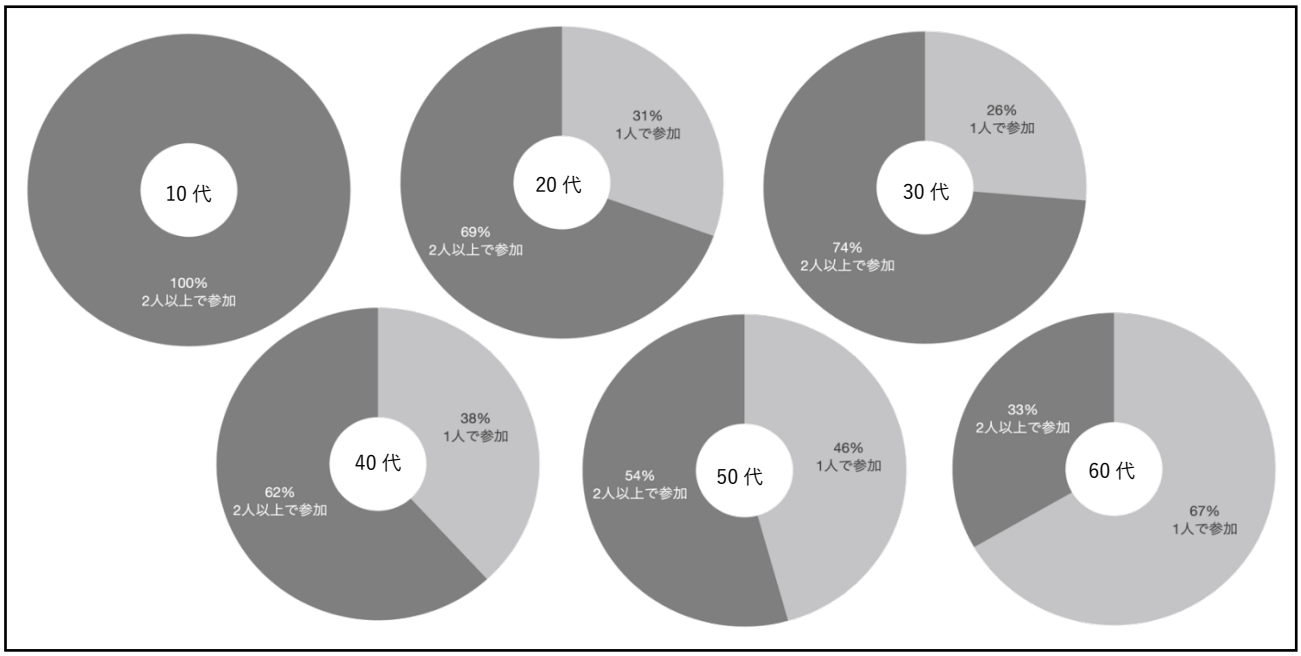
同組織からの参加人数



研究集会への参加経験

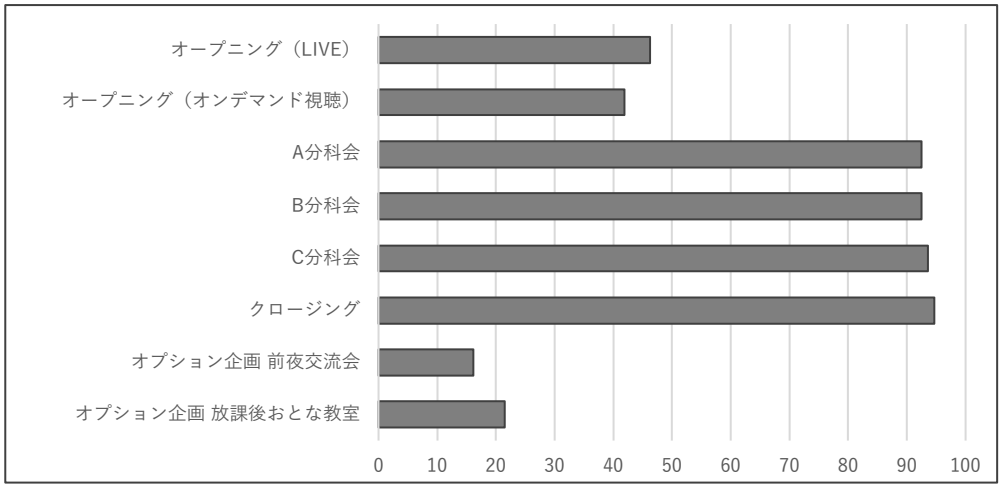


★若い世代は複数人で参加した傾向

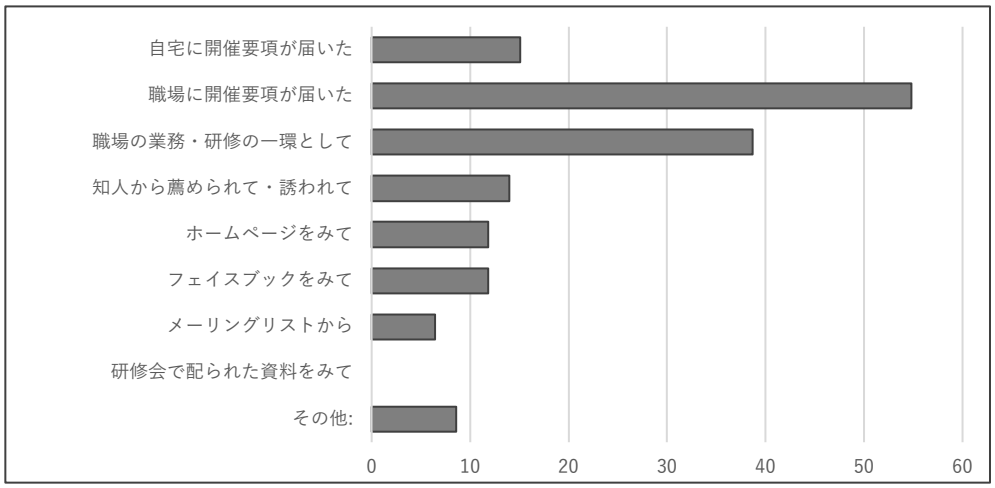


データでふりかえる研究集会 2021　～全体アンケート結果(回答数 93 件)～

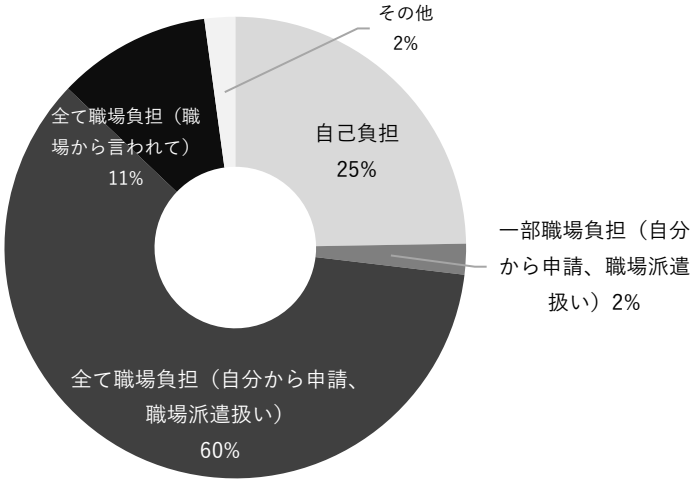
どのセッションに参加したか



参加のきっかけ

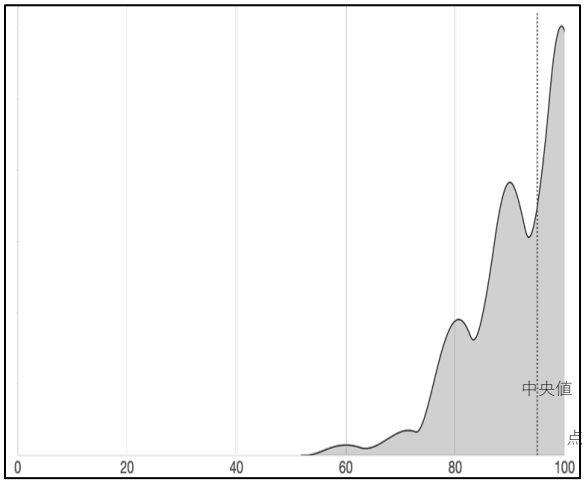


参加費の負担



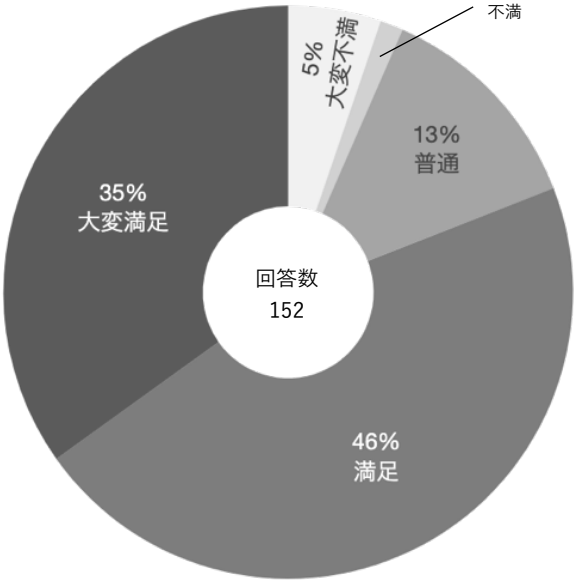
総合評価

100 点満点で点数をつけるとしたら、何点ですか？

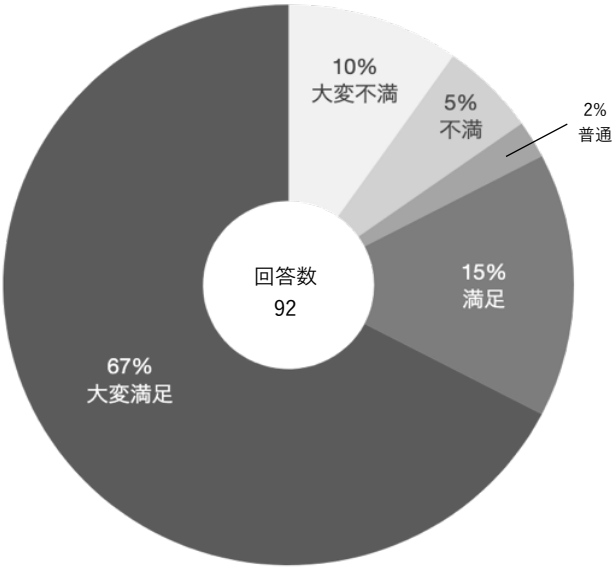


プログラムの満足度

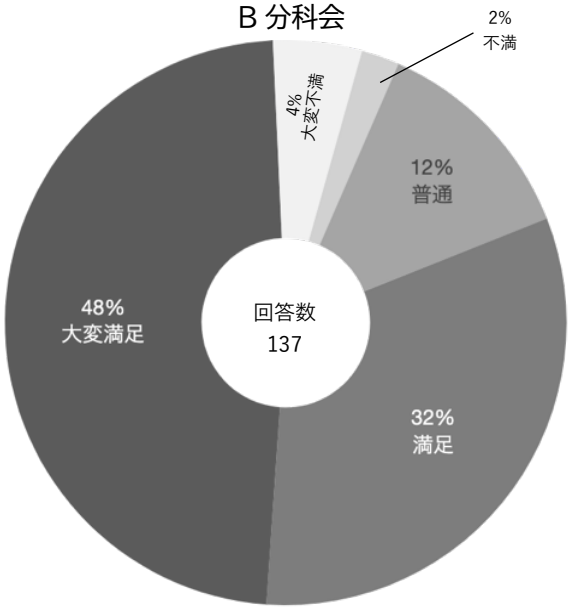
オープニングセッション



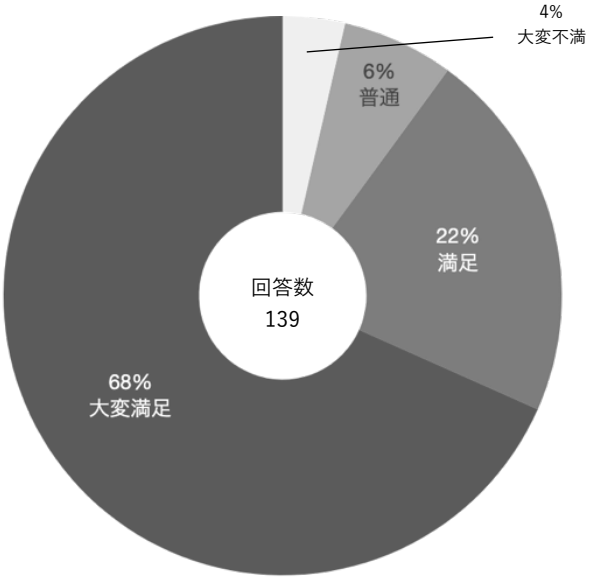
A 分科会



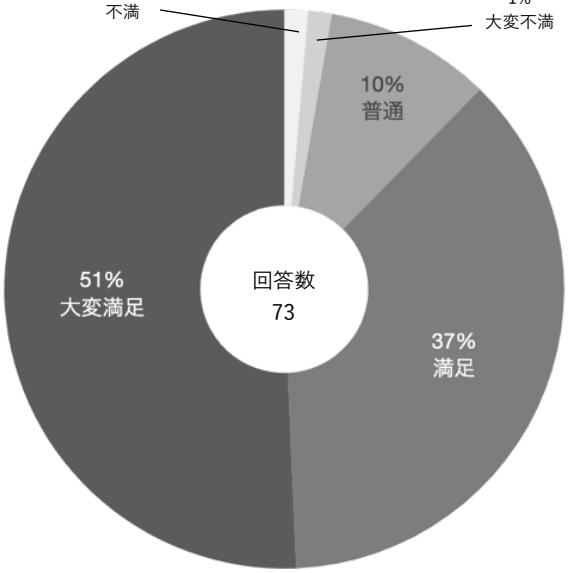
B 分科会



C 分科会



クロージング



市民の参加と協働を進める多様なコーディネーション実践研究集会 2021 企画委員名簿

NO	氏名	所 属	NO	氏名	所 属
1	上田 英司	日本NPOセンター	15	筒井 のり子	龍谷大学
2	小原 宗一	北区社会福祉協議会	16	西川　正	ハンズオン！埼玉
3	開澤 裕美	中央大学 ボランティアセンター	17	野尻 紀恵	日本福祉大学
4	鹿住 貴之	JUON(樹恩)NETWORK	18	橋詰 勝代	高島市社会福祉協議会
5	唐木 理恵子	紬ワークス	19	長谷部 治	神戸市兵庫区社会福祉協議会
6	加留部 貴行	日本ファシリテーション協会	20	早瀬　昇	大阪ボランティア協会
7	菊池 哲佳	多文化社会専門職機構	21	疋田 恵子	杉並区社会福祉協議会
8	熊谷 紀良	東京ボランティア・市民活動センター	22	三田 響子	相模原市社会福祉協議会
9	佐藤 正枝	日本社会福祉士会	23	明城 徹也	JVOAD
10	杉浦　健	共働プラットホーム	24	椋木 美緒	大阪ボランティア協会
11	炭谷　昇	日本生活協同組合連合会	25	武藤 祐子	千代田区社会福祉協議会
12	仙波 愛優佳	和光市社会福祉協議会	26	矢島 万理	国土緑化推進機構
13	竹田 純子	龍谷大学	事務局	後藤 麻理子	日本ボランティアコーディネーター協会
14	土崎 雄祐	とちぎ市民協働研究会	事務局	藤掛 素子	日本ボランティアコーディネーター協会

企画委員会　開催実績

回	開催日	開催方法	内容
第1回	2020年　8月10日(月・祝)	オンライン	事業の趣旨の共有、問題意識の発出
第2回	8月30日(日)	オンライン	問題意識の発出(継続)
第3回	9月21日(月・祝)	オンライン	分科会につながる課題やテーマの検討
作業委員会	10月　1日(木)	オンライン	分科会のコンテンツづくり
作業委員会	10月12日(月)	オンライン	分科会のコンテンツづくり
第4回	10月17日(土)	オンライン	分科会登壇者の人選、担当者の確定
作業委員会	10月23日(金)	オンライン	プログラムの全体調整
作業委員会	10月24日(土)	オンライン	プログラムの全体調整
第5回	10月31日(土)	オンライン	分科会プログラムのブラッシュアップ
第6回	11月14日(土)	オンライン	全体会・分科会プログラムの確定
第7回	2021年　3月14日(月)	オンライン	振り返りと成果のアウトプットの方法

日本ボランティアコーディネーター協会の会員になりませんか？

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

年間会費　<事業年度：1 月～12 月>

正会員（議決権あり）	10,000 円
準会員（初年度のみ）	5,000 円
賛助会員 <個人>	3,000 円
賛助会員 <団体>	10,000 円

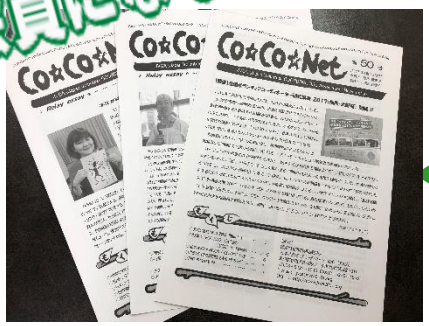
ボランティアコーディネーション力検定

-あなたもチャレンジしてみませんか？

３級から受験していただきます。
ボランティアコーディネーション経験者なら
２級、１級と段階的に挑戦してください。

市民の社会参加を支える チカラ
ボランティアコーディネーション力 3級検定

会員になると！



あなたの視野を広げる会員情報紙「Co★Co★Net」

ボランティアコーディネーションに関する今日的なテーマや話題を年３回 お届けします。
身近な問題から少し違った分野の課題まで、JVCA であなたの視野を広げてみませんか。

全国のホットな情報を「会員メーリングリスト」で

「会員の皆様のお知恵拝借」
ボランティアコーディネーターが日々感じる疑問や悩みからやりとりが始まります。 ホットな情報をいち早く「会員メーリングリスト」から知ることができます。

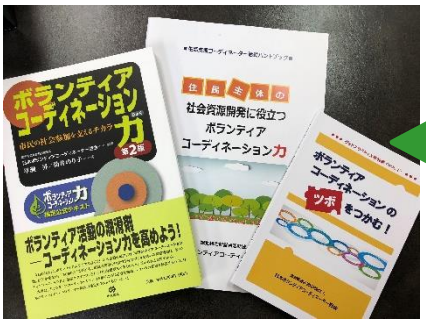
「CoCo サロン」で身近な地域で学習＆交流を！

自主的で身近な学習、交流、情報交換の場づくりを JVCA は応援しています。地域ごと、分野ごと、呼びかける範囲やテーマは自由。研修で役員が全国へおじゃました際の交流会も好評です。

▲
CoCo サロン北九州 Link 福祉施設での話し合いの風景

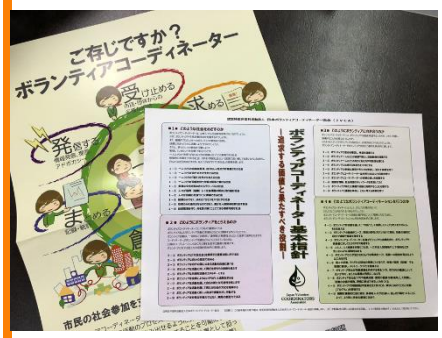
ボランティアコーディネーター必携のアイテムをお手元に

ご入会時には
「ボランティアコーディネーター8 つの役割（B4 ポスター）」「ボランティアコーディネーター基本指針（A4）」など、コーディネーター必携の基本アイテムをお送りします。

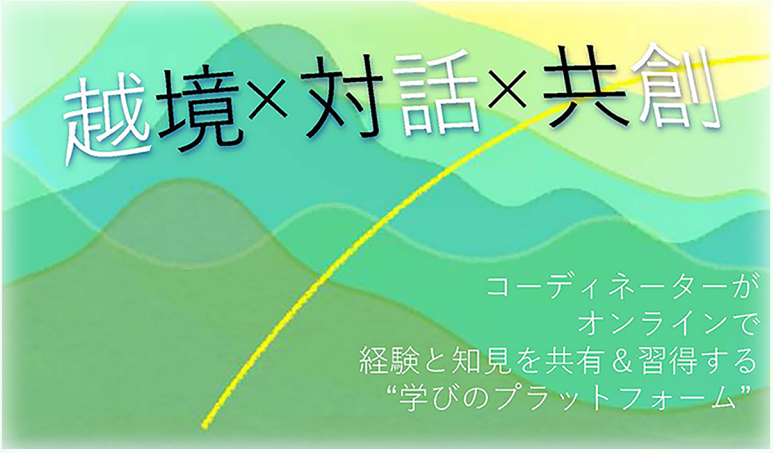


さまざまなサービスの「会員割引」も充実！

全国ボランティアコーディネーター研究集会や研修などの参加費、書籍・報告書購入などに対する「会員割引」も充実。正会員なら検定受験料も割引になります。
何度でもご活用ください。



まずは WEB で検索を　JVCA　検索



発行者　特定非営利活動法人日本ボランティアコーディネーター協会

発行日　2021年3月31日